
The Story Of Her

笙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Story Of Her

【Nコード】

N2202R

【作者名】

笙

【あらすじ】

普通の基準なんてどこにあるのかわからないけど、分類するとしたら私は普通の高校生。でも、そんな私の高校に転校してきた彼女はなんか少し違う。…と思ってたら、彼女は今時あり得ない少女剣士だった！？なんか不思議なことが起こりそうな予感…。

…まあ、なんか変化がある日常の方が楽しいかもしれないけど。

話し手の視点から語るある少女のお話。

出会い（前書き）

先行き…未定です。

書きたいままに続けていききたいと思います。

それでも許して頂けたらどうぞ。

出会い

いつも、始まりなんて突然だ。

いや、当たり前と言えど当たり前なんだけど。

この先起こることを全部知っているなんて、まあ、あり得ることじゃないし面白みだっけないと思う。なにが起こるかわからないのが人生ってもんじゃない。

だから、彼女との不思議な関係が始まったのも、突然だった。



「転校生を紹介するぞ」

なんか、すごいかも。

それが担任と共に入ってきた彼女に対する第一印象。

平均よりやや高め的身長に、ピンと伸びた背筋。真っ黒な髪は左肩の上のあたりでひとつに束ねられ、肩の前に流されている。今日、初めて腕を通したはずの制服は着崩されているわけでもないのに、しつくりと彼女に馴染んでいた。

「細波^{さざなみ}なぎさです。どうぞよろしく」

女にしては低めの声。心地よいアルトの響きにクラスメイトの誰かがほうっ、とため息をつく。そんな様子を私は頬杖をつきながらボーっと聞いていた。

「細波の席は…っと、竹下の隣が空いてるな。細波、あの頬杖ついてる奴の隣だ」

「へっ？」 「はい」

突然呼ばれた自分の名字にズルツと頭を支えている腕がすべる。机の上に激突する前に慌てて椅子にちゃんと座り直しながら私は改めて彼女の顔を見た。

自分が見られていることを感じたのか彼女がこっちを見る。目があつた。髪と同色の瞳。

そして彼女は唇の端を軽く持ち上げるようにして笑うと話しかけてきた。

「細波なぎさだ。よろしく頼む：名前を聞いてもいいか？」

まるで、男子生徒のような話し方だった。だが、違和感を感じない。これが彼女の素なんだと、感覚が告げていた。

「里奈よ。竹下里奈。よろしくね、なぎささん」

「なぎさで構わない。私も里奈と呼んでもいいか？」

「モチ。そっちの方が私も気が楽でいいわ」

コソコソと会話を交わす。担任が連絡事項を述べていく中、ちらちらと向けられるクラスメイトの視線をよそに私は少しワクワクしてくるのを感じていた。

出会い（後書き）

始めちゃいました。

どうなっていくのか作者にもわかりませんが、応援してくだされば幸いです。

案内と遭遇

ザワザワと辺りがせわしない。

昼休みのだから別に何も変ではないのだが、今日はちょっと訳が違う。

理由は私の隣で歩いているなぎさだ。

「で、あっちが購買。種類は売ってるけど、品数が少ないのが欠点ね。あと、いろいろあって面倒だから私としては弁当を持ってくるのを勧めるわ」

「わかった。だが、何かあるのか？見たところ何もなさそうだが…」

私はなぎさに校内の案内をしているところだった。手続きがあつたので、学校に来るのは初めてではないらしいが、中の様子はほとんど知らないらしい。

というわけで、昼休み時間を利用して、現在校内巡りの最中だ。教室、特別教室を順に案内して最後に購買。昼休みも半ばなので、一時期の（つまりは昼休みの最初）の騒がしさからは抜け出してはいるが、それでもそれなりに人は多い。

ちらちらと絶え間なく視線がこちらに集まるのは仕方が無いことだと早々にあきらめた。

転校生なんて珍しいし、下手をすれば単調になってしまいがちな学校生活のなかで、誰もが刺激を求めるのは当然。：私だって、そんな中の一人かもしれないし。

それでもなんというか、なぎさの場合は：雰囲気？が違うのだ。

転校生だからといって気負うこともしない凜としたたずまいに、注意深く辺りを観察する様子は年に似合わず落ち着いて見える。それに私が言うのもアレだが、なぎさは結構美人だ。平均的日本人顔の私と並べばそれが際だっているのかも。

：別にひがんでいるわけではないので、あしからず。

「……里奈？」

「ああ、気にしないで。考え事。そうだなあ、別にどうっていうことがあってもないんだけどね」

それになぎさは良い奴だ。

最初こそクールで近寄りがたい印象だったけど、案外そうでもない。朝のホームルームの後、殺到したクラスメイトの質問にもひとつひとつ丁寧な答えていたし、聞き上手でもある。たわいもない私の話も静かに笑みを浮かべながら聞き、絶妙なところで相づちをはさんでくる。さっぱりとした性格らしく対していて楽しかった。

「なら別に構わないさ。ここの生徒になるんだから、そのうちわかるだろう？」

「わかるにはわかるけど、わかってあまり楽しいことではないよ？」

「なんなんだ、それは。新手の謎掛けか？」

わずかにうつむき肩を震わせて笑うなぎさに私は苦笑する。

言葉のままではあるのだが、確かにこれじゃ伝わらないだろう。でも確かに話さなくてもそのうちわかる事だったから、重ねて説明することもしない。

ただ肩をすくめて見せて、私は教室へ戻ろうと方向を変えた。

「校内はだいたいこれで全部だよ。午後の最初の授業は体育だし、そろそろ戻ろう」

「ああ、そうだったな。じゃあ、行こうか」

そう言って私たちは購買を後にしようとする。

だが、そんな中ざわめく周囲の空気が変わった。ただ賑やかに騒

々しかった空気から、一転、ある一カ所を中心にして声をひそめてささやく生徒達の声が大きくなる。

その様子に心当たりを感じて、私は軽くため息をついた。

「いいだろー別に。俺って今日、弁当忘れてきたんだよ。なのに購買に来たら全部売り切れだしさ。それ、俺に恵んでくれないかなあー」

「む、無理ですよ。僕の昼食なんです。あ、貴方にあげたら放課後までもた……」

「るっせーな！黙って渡せばいいんだよ！」

購買で販売していた品を持つ男子生徒がいかにも不良です、といった感じの大柄な男子生徒に詰め寄られていた。それを遠巻きに眺める生徒達は気にはしながらも、助けようとする者は見られない。横を足早に通り過ぎていった男子生徒が「またかよ……」とつぶやいた。

「……もしかして、アレのことか？」

「そう。転校初日に遭遇するなんて、運がいいんだか、悪いんだか……」

再びため息。

ここは至って普通の公立高校。受験さえクリアすれば誰だって入って来れるのだ。勉強よりもけんかの方が得意な者であっても。

隣でなぎさが眉をひそめながらそちらを見ている。

「…教師陣はどうしているんだ？」

「だいたい先生は知らないでしょうね。知っていたとしても実際は黙認状態。大騒ぎしない限り出ては来ないし、そのことはあいつも心得てる」

「あいつ？一人なのか？」

「そうよ。いわゆる一匹狼。意外？」

「ああ、意外だな。こういうものは集団になるものだと思っていたから…」

顎に手を当て、考え込むようにしていたなぎさがつぶやく。

「そうか。じゃあ、あいつさえ何とかできればいろいろと面倒なことは起こらないわけだな」

「ちょ、ちよつとなぎさ…?」

嫌な予感がした。

背中につたった冷たい汗をあえて無視し、私はおそろおそろなぎさの顔を伺い見る。

本当に、本当にわずかに口元に笑みを浮かべたなぎさの端正な顔立ちは、認めたくはないが私が今までに見た中で最高に綺麗だった。

「里奈、悪いがここで待っていてくれないか？一人で帰ると迷いそうだ。すぐに戻るよ」

その美しさに圧倒されてしまった私は、ひらひらと片手を振って去ってゆくなぎさを見送ることしかできなかった。

案内と遭遇（後書き）

書きたいところまでなかなかたどり着けません…
まだまだ続く予定です。

片鱗

チラチラと視線を向けながらその場を足早に通り過ぎる生徒。

遠く離れたところでコソコソと友人と話しながら経過を見る生徒。遠く離れることさえしないが、一定の距離を保ったまま周りをぐるりと取り囲む、野次馬根性丸出しの生徒。

そんな生徒の人だかりの中にスルリと消えたなぎさの後を追って、私は慌ててその輪に交ざった。

「ほら、よこせよ！」

「あっ！！」

結局は無理矢理、男子生徒の持つ袋を奪った乱暴者（面倒くさいな。いつも言ってるからアイツにしておこう）は満足そうに笑う。自分の昼食を捕られてしまった男子生徒は悔しそうにうなだれた。

「そうそう、最初っからこうしてれば良かったんだよ。俺の口に入る方が食い物のほうも嬉しいってもんだろ」

「そうは思いませんが。ちゃんと料金を払って食べてもらった方が食べ物としても本望でしょうに」

得意げなアイツが掲げた袋をヒョイツと後ろから誰かがかすめ取った。

「三年生とお見受けします。仮にも上級生なのですから、こういう行いはするものではないと思いますよ。それとも、これがこの学校ルールの伝統なんでしょうか？」

なぎさだった。

闖入者に周りの生徒がどよめく。

「あいつ、だれだ？」

「転校生だったはずだろ？ たしか2－Aの」

「女子じゃん。大丈夫なのか？」

周りで交わされる会話に私は頭を抱えなくなった。

マズイ。いやかなりとても非常にマズイ気がする。こんな事になるんだったら、もっと早くに教室に戻るべきだった。

後悔がぐるぐると渦巻く私の胸中など知らずして、なぎさは堂々とアイツと言葉を交わしていた。

「誰だよ、お前。俺にけんかを売ってるのか？」

「ただの転校生ですよ。それにけんかを売っている訳ではありません。強いて言うなら：提案でしょうか？」

口調はあくまでも丁寧。だが、その言葉の端々に明らかな軽蔑が見え隠れしているのは、私の気のせいだと思いたい。

しかし、アイツもそこまで馬鹿では無かったらしく、なぎさの言葉の裏にある真意を読みとっているようだ。口元がだんだんと引きつり始め、バキボキと指を鳴らし始める。

ついでに述べておくならば、昼食を捕られた男子生徒の顔色は青を通り越して、真っ白だ。

「良い度胸してるじゃねえか。女だからって言って、手加減してもらえると思ってるんじゃないだろうな」

「：暴力に訴えるつもりは無いんですが……。この商品を彼に返却し、謝罪する意志はないと？」

「ねえな。それに謝るのは俺じゃねえ。お前の方だろ！」

硬く握りしめられたアイツの拳がなぎさの顔へと向かう。

勢いからして寸止めなど期待できない。当たる。このままだと確実に当たる。

なぎさが殴られる……その様子を想像して私は思わず目を閉じた。それに伴われるだろう音も聞きたくなくて、手で耳を覆う。

…だが、想像していたものは何一つなかった。

「あれっ……？」

代わりにその場を満たしたのは沈黙。

とうとう堪えきれなくなって、私は耳を覆っていた手を外し、おそるおそる目を開けた。

見たところ、目を閉じる前の様子と変わったところはないようにみられる。だけど、すぐにそれは間違いだということに気が付いた。確かになぎさの様子に変わったところはみられない。ビニール袋を片手に提げ、アイツの方を見たまま真っ直ぐに立っている。彼女の顔に殴られたような痕など、少しも無かった。

次に周囲の様子。野次馬の数はほとんど変わらず。変化が見られるのは、その表情だ。誰もが一樣に啞然とした顔をしている。目をこする者が数名、あげくの果てにはハンカチを取り出して、眼鏡をふきだす者がいる始末。

……一体、みんな何を見たんだろう……？

「な、なっ……！！！」

そして残る一人。

アイツは不自然な格好で固まっていた。殴ろうとしていたはずの拳は行き場を無くして宙をさまよっているし、一步踏みだした時に出了勢いが殺せず前めりになっている。目は大きく見開かれ、口はパクパクと開閉を繰り返していた。

「暴力では何も解決しませんよ？ あきらめてこれを彼に返したらいいかがですか？」

何事も無かったように袋を掲げてみせるなぎさの様子に、おかしいのは自分たちの方なのかもしれない、と錯覚してしまいそうになる。

勢いよく首を振って、私はなぎさ達を凝視した。先ほどはなにが起こったのかさっぱりだけれど、今度こそ見逃してなるものか。

…止めようとする気持ちは全く起こらなかった。

「て、てめえ…。ちょ、調子にのりやがって…」

急いで、体勢を立て直しアイツが今度は両手を握って構える。真剣度はさっきの1.5倍増し。ぎらぎらと光った目は小さな子供なら泣いて逃げ出しそうだ。

あっ、違う。子供でなくても側にいる男子生徒が半泣きだった。

なぎさが嘆息する。

「これだけ言ってもダメですか……」

「うるせえ、黙れ！そして、俺に、盾突くんじゃ、ねえ！」

アイツの渾身の右ストレートが放たれる。

デジャビュ

既視感。さっきはここで目をつぶってしまった。だけど、今度は逆に目を見開いてその様子を見つめる。

拳骨を見据えるなぎさがわずかに笑ったような気がした。

「え……………」

なぎさは避けた。それもわずかに顔を傾けただけで。

それから先の事は、よくわからない。いや、説明するだけなら簡単だ。

なぎさがアイツを返り討ちにした。それだけ。

あまりにもあっという間の出来事で、私の視覚をはじめとする五感がなにも反応しなかった。：つまりはそういうことだ。

「：流れでやってしまったけど：これは正当防衛だよな？」

床で目を回しているアイツを見下ろしながらつぶやなぎさの口調に、勝ち誇ったような響きは感じられない。むしろ、困った、という気持ちの方が強そうだ。

軽く吐息をついたなぎさは腕に引っかけていた袋を手に男子生徒に歩み寄った。

「乱暴に扱ってすまない。中身は大丈夫だと思うんだが：」

呆然と突っ立っている男子生徒になぎさは袋を差し出す。未だに信じられないといったようなその男子生徒は目を丸くして差し出された袋を見つめていた。

「？お前のなのだろう？早く食べないと、そろそろ昼休みも終わってしまふぞ？」

なぎさの言葉によりやく我を取り戻した男子生徒が慌てて袋を受けとる。そして勢いよく頭を下げた。なぎさはひらひらと手を振ることでそれに返す。そうしながら、ぐるりと周りを見回すなぎさの目があった。

微妙な空気を醸し出している周囲の人間を気にする様子もなく、なぎさが真っ直ぐにこっちに歩いてくる。無言で彼女の前に道を開ける生徒達を目の端に納めながら、私はなぎさに向かって手を胸の

前で軽く振った。

その時顔に張り付いていた笑みは、決して引きつってはいないはず。

「待たせて悪かったな、里奈。じゃあ、行こうか？」

なぎさはまるで待ち合わせ場所にやってきた、というような口調でそう言った。

なんか、すごいかも。

彼女を見たとき思った感想の理由が少しわかった。

だけど、本当に少しだけだったのだと私が痛感するのはもう少し後の話。

片鱗（後書き）

なんか、終わり方が微妙になってしまいました…
補足は次の話以降でしていきたいと思います。

日常

ボールが弾む。

靴が床とこすれて音を立てる。

時折混じる笛の音。

今は体育の時間：バスケットボールの試合の真っ最中だ。

「へえ…。うちのクラスの男子がA組に美人の転校生が来た、とかって言ってたのは知ってたけど、まさかアイツを倒しちゃうほどの実力者だったとはね」

「うん、そうみたい」

「それでどんな風だったの？柔道？空手？それとも合気道？」

「その三つの違いがなんなのかさえ知らないわよ。それにあつという間で何がなんだかわからなかったし…」

授業中ではあるのだが、実質試合に参加していない私のような者は暇なので、壁に沿って座り込み、ぼそぼそと話し込んでいた。

相手は隣のクラスの宮野鈴鹿。みやのすずか小・中・高と同じ学校である友人だ。

去年まで同じクラスだったのだが、今年のクラス替えて別々になってしまった。といっても、クラスは隣だし体育などは二クラス合同なので、こうして一緒になったときはよく話す。

今も試合メンバーに入らなかった彼女に先ほど見たことの報告をしていた。

「ふーん。まあ、本人に聞くのが一番手っ取り早いかな。じゃなきゃ、他に見ていた奴らに聞くんか。うちのクラスはお祭り好きな奴が多いからなあ。一人二人はその場にいるでしょ」

「だねえ」

そう言って試合をする生徒の姿を追う鈴鹿に私も顔を上げた。ちようにいいタイミングでなぎさがシュートを決めた。

ある程度予想できたことだったが、なぎさは体育が得意だ。確かめた訳ではないが、きつと運動全般が得意なのだろう。早々にそれを悟ったクラスメイト達は、貴重な戦力として彼女を試合に駆り出していた。なぎさもそれに応えてそれなりの活躍をみせるものだから、なぎさの評判はうなぎのぼりだ。先ほどの出来事もあわせて、明日頃には学校中に広がるだろう。

ピ、ピイイイー！

試合終了の笛が鳴った。

わずかに頬を紅潮させたなぎさが、他のクラスメイトに肩を叩かれている。一言二言彼女たちと言葉を交わすと、なぎさは彼女たちと別れて一人でこちらにやってきた。

「お疲れ。大活躍だったじゃない」

「ああ、ありがとう。だがやはり疲れるな。隣、いいか？」

「いいですよ、どうぞどうぞ」

一言断りをいれて、鈴鹿の隣になぎさは腰を下ろした。鈴鹿を挟んだ形で座るようになり、私は軽く身を乗り出すようにして、お互いを紹介する。

「鈴鹿、こっちがさっき話してた転校生の細波なぎさ。それでなぎさ、こっちは……」

「宮野鈴鹿よ。よろしく、細波さん」

「なぎさで構わない。回りくどいのは苦手だね」

「じゃあ、遠慮無く。昼休みの一件は聞いたよ。なんか武術でも習

ってるの？」

さっさと自己紹介を済ませると鈴鹿は興味津々といった様子で尋ねる。

いきなり言われたなぎさはとまどったようにまばたきを繰り返していたが、しばらくして「ああ」と思い至ったようだった。

「別に武術というほどのものじゃないさ。ただ、祖父がこういうのをやっていてね。護身術の一環だよ」

「へえ、お祖父さんすごいんだね。じゃあ、部活はそういうのに入るの？」

と言っても、ウチの学校にあったのは柔道部くらいだけ…とぼんやり思いながら私は言った。決して武術に詳しいわけではないが、なぎさがすごいのはなんとなくわかる。きっと彼女ならどんな大会でも入賞…下手したら優勝もあり得るかもしれない。

だから、彼女が部活に入ることを私は欠片も疑って無かったのだが…

「部活か…入らなきゃダメなのか？」

「ダメって訳じゃないけど…ってええっ！」

「入らないの!？」

思わず、素っ頓狂な声上がる。私の隣で鈴鹿も目を丸くしていた。

困ったような顔をして、なぎさが頭をかく。

「いや、さっきの子達にも誘われたんだが、私自身そんなに部活動に興味はなくてな…。断りはしたんだが、ここの学校は絶対加入なのか？」

「う、ううん。そう言う訳じゃないよ。私は陸上部だけど、里奈なんかは帰宅部だし…」

「ふうーん。運動が苦手で特にこれといった特技があるわけではない私と違って、なぎさが入らないのはもったいないような気がするけど…」

「別に部活をするために学校に来るわけではないからな。入る必要があるわけではないのなら、入らないよ。その方が気が楽だしな」

肩を竦めて、なぎさが軽い身のこなしで立ち上がる。立ち上がった位置から、こちらを見下ろして彼女は言った。

「ほら、そろそろ授業も終わりだぞ。行こう」

なぎさが言い終わるやいなや体育教師の集合を告げる笛が鳴り響く。

背を向けて歩き出すなぎさの後ろ姿をみながら、私たちはお互いに顔を見合わせてやれやれ、とため息をついた。

――本当に不思議が多い転校生だ。



「聞いたか？2-Aの美人転校生の話」

「学校一の不良児を倒したって奴か？」

「いやいや、ものすごく強い彼女のじいさんから直接修行を受けてるとか」

「まだそんな話しか聞いてないのか？ウチの学校の生徒じゃ相手にならないからって、部活にも入らないって宣言したって聞いたぜ」

……………まったくもって馬鹿らしいにも程がある。

自分の学校のレベルの低さに嘆きたい所ではあるが、自分もその

学校の生徒であることに代わりはないのでやめた。けなしたところで、自分が惨めになってくるだけだ。

イライラのエネルギーを全部歩くことに回し、さっさとくだらないうわさ話の現場から立ち去る。

教室に着くまでそんなことを続けていたのだが、それでも修まらずいつもより乱暴に自分の席に座ると、苦笑しているなぎさと目が合った。

「おはよう、里奈」

「おはよ、なぎさ」

とりあえず、朝の挨拶。…うん、これは大切だ。

そう思って、落ち着いたのもわずかな間。やっぱ我慢ができず、私は不満をなぎさに向かってぶちまけた。

「ウチの学校の男子は根も葉もない噂しかできないっていうの！？どこから聞いて来たんだか知らないけど、そんな話をしている暇があったら勉強をしろ、勉強を！！」

「同意はしないでもないが、別に悪い噂という訳でもないのだからそこまで怒ることもないだろう？」

「いや、怒ります。大事な友人に転校早々、変なイメージをつけさせてたまるもんですか！」

「本人に向かってそれを言う竹下も竹下だと俺は思うけど？」

「ふうてんのすけは口を挟まないっ！」

「いや、俺の名前は楓太^{ふうた}なんだが…」

会話の途中（といっても私が一方的になぎさに話してるだけ）に割り込んできたのは、クラスメイトの蔵本楓太^{くらもとふうた}。席の近さから結構よく話す。先ほどのふうてんのすけというのは、私が勝手につけたあだ名だ。

もう慣れたもので楓太は軽く流すと、なぎさの方に視線を向けた。

「昨日は大活躍だったそうじゃないか。大体は聞いたよ」

「それも例の噂話か？それじゃあ、あてにならないから気にしない方がいいぞ」

「いやいや、俺が聞いたのは被害者張本人だからな。確かな話だぜ」
「被害者？」

首を傾げる私となぎさに楓太は言った。

「アイツに昼飯を取られそうになってた男子生徒だよ。近所に住んでる奴でな、昔から顔なじみなんだが、昨日たまたま会って興奮気味に教えてくれたぜ？」

そこまで聞くとようやくわかった。昨日危うく犠牲者になりかけていた不幸な男子生徒だ。いや、なぎさに助けてもらったのだから幸運な、と言い換えるべきなのかもしれないが。

「俺が同じクラスだ、って言ったらお礼を言って下さいだよ。ありがとうな」

「たいしたことじゃないさ。購買にお世話になるのにいらない気苦労はしたくないからな」

おどけたように頭を下げる楓太になぎさも軽い調子で返す。

しばらくそのまま三人で話を続けていたが、朝のチャイムが鳴り響いた。

「おっと、じゃあ今はこの辺で。今日も活躍を期待してるぜ？噂の美人転校生さん」

「その変な肩書きは早く無くなって欲しいものだな」

苦い顔をするなぎさに私たちはそろって笑う。
ガラガラと音を立てて教室のドアが開き、いつものホームルームが始まった。

日常（後書き）

ファンタジーとしたのになかなか前に進みません（汗）
多分次には入ると思うんですが：

狩人

……えーっと、これはどうした訳でこういう事態に陥っているの
だろう？

ただでさえそう多くはない私の情報収容量は、いろんな事を詰め
込み過ぎてパンク寸前だ。

情報処理のために血管が切れてしまいうんじゃないかって程、脳み
そはフル回転しているはずなのに、ちゃんと理解できて、納得でき
たってものはひとつもない。

私をこんな状況に陥らせているのは目の前の視界に入ってくる以
下の事が原因。

一、私はちゃんと家に帰るための見慣れた道をたどっていたはず
なのに、いつの間にか立っている全くもって見覚えのない場所。

二、お初にお目にかかる、いかにも危険物であろう物を持って立
ちはだかる全身黒ずくめの人(?)達。

三、そんな状況にありながら、動揺する様子を欠片も見せないな
ぎさ。

「里奈っ！危ないから出来るだけ下がってろ！！」

……うん、誰かこの状況を一から十まで理路整然と説明してくれ
ない事には私は立ち直れそうにない気がする。

どうしてこういう経緯に至ったのか説明するために多少時間を遡
る。



キンコーンカーンコーン♪

終業の鐘と共に生徒が一斉に席を立つ。

部活の為に教室を駆け出して行く者もいれば、放課後の予定を話し合うために楽しみに集まり始める者もいる。

「そういえば、なぎさの家ってどこなの？」

「古い住宅街だよ。徒歩で二十分くらいだな」

「あっ、それなら私と一緒にだ」

昨日とは違って何事もなく一日を終えた私たちは自然の流れで一緒に帰ることになった。

私は帰宅部だし、なぎさは部活に入らないことを明言している。

昨日は転校の手続きだ、なんだと忙しかったようだが、それも昨日のうちに終わったと言うことだ。

そんなわけで二人並んで校門を出る。私たちの家は街の中心からは離れたところにあり、必然的に家に近づけば近づくほど人気は少なくなる。人家もぽつぽつと一軒一軒離れて建っているため何となくもの淋しい。それでも二人並んで歩いていれば、それほど淋しさは感じなかった。

そんな穏やかな高校生の時間を壊したのは、奇妙な違和感だった。なにか薄い膜をくぐったかのような感覚が身のうちを通り抜けていく。ゾワリとした冷たさはまるで冷水を浴びたようだ。眉をひそめて首の後ろをさする私の横で、なぎさがはっとしたように辺りを見回した。

「?なぎさ?」

「…里奈、私の側から離れるなよ」

「えっ?なんで……?」

疑問の声は唐突に巻き起こった突風にかき消された。目も開けられない強烈さに私は足を踏ん張って耐える。鞆を持つ手を顔の前に掲げて、風が止むのを待ってから目を開けた私の視界にさっきまでいた場所と180°異なる風景が入ってきた。

「なんて時に現れてくれるんだか……」

苦々しげななぎさの声がする。驚きで声も上げられない私をよそに、私をかばうようにして立つなぎさは突如として現れた真っ黒なそれらに告げた。

「招待を受けたつもりはないが？…デイズハンター黒衣の狩人？」

「それは失敬。だが、我等の目的はただひとつ。そちらの対応次第ですぐに終わる」

くぐもったように響く声。たぶんそれは目の前にいる真っ黒な奴が発しているのだろうが、地を伝ってくるその声はどこから聞こえて来るのかわからない。

「目的？一体、何のことかな？」

「知らぬ訳ではあるまいよ、細波の血を受け継ぐ者よ。それに我等で無くとも、我等の同胞がお前の元に訪れているはず。…もつとも彼らが戻ることは無かったが」

奴らの腕（なのだ）と思う。見えた訳ではないけれど）が一斉に何かを求めるように伸ばされる。

それがどこまでも伸びてきそうな気がして、私は一步後ろに後ずさった。舗装された道路だったはずの足下で、乾いた砂がジャリと音をたてる。それに改めて気づいて辺りを見回せば、そこには所々

に岩が点在するだけの赤茶けた荒野が広がっていた。

「問おう、細波の血縁よ。我等が欲し、お前が有するその刀、素直に差し出す気は？」

「ない。これは我が一族が護りゆく定めを負った宝刀^{もの}。お前ら狩人ごときに渡せるものか」

「そうか…。それは残念」

伸ばされた腕が下ろされ、代わりに奴らが持っていた危険物（槍の様だけれどよく分からない。なにせ実物を見たことがないので。けれど鋭さは本物のようだ）が前に押し出される。

「それでは奪おう。それが我等、^{デイズハンター}黒衣の狩人の務め」

遠いところにいたはずの黒ずくめの連中が滑るように近づいてくる。

固まってしまって動けない私を押し飛ばすようにしながら、なぎさが叫んだ。

「里奈っ！危ないから出来るだけ下がってろ！」

ここで冒頭部分に戻る。

押し飛ばされた私は二、三步よろめくようにして離れたが、その後足がもつれて転んだ。慌てて起きあがると、なぎさは持っていた鞆を放りだし、私から離れるようにして走っていく。続くように黒ずくめの奴らがあとを追った。

「なぎさっ！！」

叫ぶが、私にはどうしようもない。分かってはいるが、何とかし

なくては、と気持ちばかりがはやる。

そうして見ているうちに、黒ずくめの一人が持った槍を構え、投げた。背を向けて走るなぎさにはそれは見えていない。

警告したいのに声が出なくて、私は手で口を覆った。投げられた槍が真っ直ぐになぎさに迫る。

ふと、察したようになぎさが後ろを振り返った。だが、避ける間もなく槍がなぎさのいた場所に突き刺さる。乾いた砂が砂煙となつて舞った。

「ーーーーっっ！」

声にならない悲鳴が漏れる。

黒ずくめの奴らは砂煙のたつ場所から離れて立ち止まった。時が経つほどに細かな砂は舞うのをやめ、その向こうを明らかにし始める。

薄れた砂煙の向こうにはしっかりと立つ人影があった。

「獲物を狩るのが狩人なら、その狩人を狩る私はなんなのだろうな」

はっきりと聞こえるアルトの声。

自分と並ぶほどの長さを持つ漆黒の槍の横に立つ、なぎさの姿がそこにあった。

「まあ、いいさ。本来、私の仕事は狩ることではないし」

どこから取り出したのか、なぎさは細いガラスの小瓶をその手に持って、口元に薄く笑みを貼り付ける。彼女の手の中にある小瓶の中で、紅い液体が揺れた。

「そんなに請い願うのなら、自らその刃にかかって消えるがいい」

手慣れた様子で小瓶の口を開け、その口元を下へと向ける。中の液体が筋となって滴り落ちた。

「ー来い、ゆうなぎ“夕風”」

滴った紅い液体が、地面に長くのびるなぎさの黒い影と交わる。
：瞬間、なぎさの影から伸び上がるようにして、棒状の何かが立ち上がった。

なぎさはためらうことなくその先端を掴む。そしてそのままそれを横なぎに振り払った。

現れたのは刀だった。優美な曲線を描く刃がわずかな光を受けて輝く。暗い陰が覆うこの場所で、なぎさの立つところだけが白い明るさに照らされている様に見えた。

「来るなら来い、デイズハンター黒衣の狩人。黒く染まったその腕で、我等一族の宝を奪えるのなら」

刀の柄を両手で握り、刀身を正眼に構えたなぎさが黒づくめの奴らを見据えて笑った。

狩人（後書き）

やっと、本題に入れました…。
ここからはトントんと話が進む……ハズです。

少女剣士

日本刀。

古来は多くの者が持ち歩き、合戦などに用いられたという。

今日に至るまでにその多くは姿を消した。残っている物も観賞用としてあり、普通に生活さえしていれば目にすることはない。

…だけど今、私の目の前では刀本来の目的で扱われる美しい日本刀と、それを意のままに使いこなす使い手の姿があった。

タンツとなぎさが地を蹴る。呼応するように黒ずくめの奴らが動き始めた。何人かいる中でばらけるように広がる。そのうちの一人がなぎさの前に出た。

一気に差を詰めた両者はなぎさは刀を、黒ずくめの一人は槍を振るう。

キイイイイン！！

金属音が鳴り響いた。初撃を真っ向から受け止めて、両者はらみ合う。

肉薄したのは、わずかの間。すぐになぎさは黒ずくめの槍を押し返すと、そのままフツと身をかがめた。その直後、背後から別の奴がつきだした槍が宙をきる。

しゃがみ込んだなぎさは、今度は立ち上がる勢いを利用して、宙に跳び上がった。黒ずくめの奴らの背丈ほどに跳ぶと、突き出されたままの槍を足がかりにして二人の囲みから抜け出す。一人の背後に降り立ったなぎさは、慌てて振り返るその一人に構うことなく、その身体を切り裂いた。

身にまとうようにしていた黒のマントが千切れる。小さな布の一

片が風に飛ばされて、曇天の中へ吸い込まれていった。

斬られた黒ずくめの奴が倒れることはなかった。ただその存在が揺れる。ぶれる。

一瞬後に、黒ずくめの姿はまるで陽炎のように揺らめいて消えた。

「まずは一人…」

そうなぎさの口が動いたように見えた。

だが彼女にゆっくり落ち着いている暇は無かった。同胞と呼んだ者の消失を気に留めてなどいないように、次の連中がつっこんでくる。

「全く、無粋な連中だな…」

淡々とつぶやくなぎさの表情に、感情の色は見えない。

斜め後方から仕掛けてきた黒ずくめの槍を、身を反転させながら受け止める。今度は押し返すのではなく、受け流すようにして攻撃をかわしたなぎさは、その黒ずくめの横をすり抜けながらつぶやいた。

「私とて、消えた者を悼む気持ちくらいはあるんだぞ…」

白い光が閃く。その言葉の終わりと共に、二人目の黒ずくめの姿が消え去った。

残る黒ずくめの数は…三人。

周りを取り囲むようにしているその三人は、なぎさとの間合いを図るようにして動かない。その中には先ほど、なぎさに向かって槍を投擲した者もあった。が、その手にはいつの間にか同じ槍が握られている。何処からか取り出されるそれは、いくらでも再生可能らしい。

「見事だな。：いくら時代ときが流れようとも、細波の血筋は健在らしい」

「褒め言葉として受けとっておくよ。：見ての通り、私にお前らの望むような意志はない。このまま引き下がるのであれば、追うつもりはないのだが？」

「戯れを。狩りをしない狩人など、いるわけがないと知っておろう？」

「そうだったな。：残念だ。あなたは今までの奴らよりは話が分かると思ったんだがな」

「期待に添えなくても致し方あるまい。もとより、交わる事なき間柄故」

「ああ：それもそうだな」

なぎさが苦笑を口元に浮かべる。わずかに落とした目線は赤茶けた地面に注がれていた。はらりと顔にかかった髪が彼女の顔に影を落とす。

だが、それもつかの間。次に顔をあげたなぎさの視線は、真っ直ぐに正面の黒ずくめに向いていた。

「さて、話に時間を割く暇はなかったんだった。再開といこうか」

右手に持った刀を構え、左手の指を刀身に沿って滑らせる。

そんななぎさの様子を見て、残る黒ずくめ達も下げていた槍を構え直す。

端から見れば、なぎさが三人に囲まれた状態だ。後ろの方にいる二人が音も立てずに動き出す。そこにいることは分かっているはずなのに、なぎさは正面の黒ずくめを見据えたままだ。

「ーっ！なぎさっ、後ろっ！」

ここに来て、ようやく声が復活した。自分でも驚くほどの大声が空気を震わせる。

だが、注意を促すためのその声は、同時に危機をも生み出した。私の声に押し出される様にして、黒ずくめの三人共が一斉になぎさへと迫る。

「私からの餞別だ。大技で葬^{おく}ろう」

それでもなお、なぎさの表情に焦りは見えない。

槍の穂先がなぎさに届く：刹那、彼女の周りで白刃が煌めいた。

「盛大に渦^{りゅうせんか}卷け、流旋渦^{リウセンカ}」

爆発が、起きたのかと思った。

小さな風が頬をなでた、と思った途端に今度は突風が襲ってくる。その中に混じる砂がパチパチと肌を打った。顔をかばうために掲げた腕の間から、私は必死になってなぎさ達の方を見る。

まず最初に、光が見えた。刃^{やいば}が疾^{はし}つたのだろうその場所に、白い光が軌跡を描いていた。いくつも疾^{はし}るその光の中心には、収めるように刀を下ろしたなぎさの姿がある。

黒ずくめの連中が、三人揃って宙に舞っていた。その身体のあちこちに、白い光が重なるように見えている。重力に従い、放物線を描いて落下するはずの身体は、地に着く前にかき消えた。

「あっ……」

顔を見せないかのように、深く下ろされたフードの下。そこがわずかに覗いたようだったけれど、よく見る前にその姿は消えてしまっただけで確認することは叶わなかった。

「里奈っ！大丈夫か！？」

駆け寄ってくるなぎさの手に、日本刀はもうなかった。

慌てて周りを見回しても、さっきまで広がっていた赤茶けた大地は見えない。あるのは慣れ親しんだ通学路だけ。人通りのない道路に私となぎさだけがいた。

――…夢…？

脳裏に浮かんだその文字はすぐにうち消した。だって、なぎさの鞆は私からそう遠くない所に無造作に放り投げられているし、固く握った手のひらには、転んだときについた砂が今でも残っている。昨日今日と、絶やさなかったなぎさの涼しげな表情が崩れているのも、その思いに拍車をかけた。

「本当にすまない、怪我不いか？」

「だ、大丈夫。頭は混乱して使い物にならないかもだけど、怪我とかは全く…」

「嘘をつけ。膝、血がにじんでるぞ」

なぎさに言われて初めて気づいた。確かに膝をすりむいている。さっきまでは全然感じなかったのに、気づいた途端にヒリヒリとした痛みが伝わってきた。

思わず顔をしかめた私に、なぎさが苦笑を浮かべる。

「家に寄らないか？手当てくらいはする。…それに話したいこともあるしな」

「…うん、お言葉に甘えることにする。私も聞きたい事があったんだ」

わずかに真剣さを宿したなぎさの声に気づかない振りをして、私

はあえておどけた調子で返した。

少女剣士（後書き）

やっぱり、書きたいことを表現するのは難しいですね…
まだまだ要修行です（汗）

入口

ファンタジー
空想の世界なんて、アニメとかマンガとか小説の中の世界ばかり
かと思っていた。

その世界観や、その世界に生きる登場人物に憧れた事がないなん
て言ったら嘘になる。

だが、現実主義者^{リアリスト}とまではいかないまでも、普通の高校生を自認
する私は、自分に限ってそんなことは起こりっこないと割り切っ
ていた。事実、生を受けてから十七年、自分の頬をつねって、現実か
どうかを確かめなければならぬほどの出来事は、今日起こったの
が初めてである。

……だから。

ちょっとこの状況を楽しんだって、仕方がないことなんじゃない
だろうか……



なぎさの家は年期が入った日本家屋だった。うちの家とそう離れ
てはいなかったが、少々奥まった所にあったため、目にするのは初
めてな気がする。

堂々とした門を開け、敷地の中に入っていくなぎさの後に続いて、
私も一步門の中に踏み込んだ。

（あれ…？）

ちょっとした違和感。

それはさっき、変な世界に入り込んだ時と似ているけど、違う。
強いて言うならば、空気が澄んだ。というような感じだろうか。訝

え冴えとした空気に、身が洗われていくような感覚。

「ただいま」 「お邪魔します」

鍵を開けて、開いた扉の向こうに向けてなぎさが言う。そんななぎさの後ろから、伸び上がるようにして、私は中を覗き込んだ。

「ああ、お帰り」

誰もいないのだろうと思っていたのに、思いがけず返事が返ってきて、ドキリとしてしまう。奥の部屋から顔を覗かせたのは、ボサボサと髪の毛のたった眠たげな目の男性だった。

「なんだ、割と遅かったな…って悪い。お客さんか？」

「友人だよ。いろいろと良くしてもらっているんだ」

「あっ、竹下里奈です。お邪魔しています」

慌てて頭を下げる。

見た感じ、まだ若い。二十歳…よりもやや年かさくらいだろうか。普通ならなぎさの兄かと思うところだが、彼女は一人っ子だと聞いている。とすれば……

「従兄の崎津霧也やづきだよ。一緒に暮らしているんだ」

「いわゆる居候、ってやつだな。まあ、俺は奥に引っ込んでいるんで気にしないでくれ」

「そのことなんだが…」

肩を竦めて踵を返す霧也を、なぎさが引き留める。

怪訝な顔をして振り向く霧也に、何気ない口調で告げた。

「帰り際、デイズハンター黒衣の狩人に遭った。里奈も一緒だ」

その一言で、霧也は全てを了解したようだった。

眠たげな瞳が一瞬、大きく見開かれる。しばし考え込むように下を向いた後、顔を上げた霧也の顔は、先ほどどうってかわって引き締まって見えた。

「部屋に入ってきてくれ。お茶でも出すよ。話はそれからだ。…じいさんは道場に行っていていないが、俺に出来る範囲で参加する」

「ありがとう、助かるよ」

どこかへと歩き去りながら、ヒラヒラと手を振る霧也になぎさがそう声をかける。何も言わないうちに話が進んでしまった事に少々啞然としながらも、私はなぎさに顔を向けた。気づいたなぎさが笑って中に入るように促す。

「里奈は最初にその膝だな。あとはゆっくり菓子でも食べながら話そう」

そう言ってなぎさは小さく笑って肩を竦めた。

「といっても、家に学友を呼ぶのは初めてなんだ。たいしたことは出来ないけどな」

「…それは光栄ね。なぎさの家の初招待客じゃない」

あえて突っ込んだ話はしない。数時間前までの調子を保つ。

だけど少し変わった声音に、なぎさは気づいているだろうか。

胸のうちからあふれる興奮。不謹慎だと分かっているながらも、弾む声を押さえるのに苦心する。

「ああ、そう言うことになるな」

「でしょう？じゃあ、心して行かないとね♪」

なぎさの：つまりは細波の家に足を踏み入れること。

ファンタジー

それは黒ずくめの奴らとの会話から察するに、空想の世界の入り口に立つことと同義だ。：帰り道、突然変なところにいて、戦う少女剣士を見ました、というようなそんな世界の入り口に。

覗き込んだところで、出口は見えない。もしかしたら、そんなものは無いのかもしれない。

‘迷い込んだら、出られない’

よく見る台詞だ。フリース

だからといって、迷う事はしない。引き返さない。幼い頃、本気で憧れた非現実の世界が、今、目の前にある。ここで目をつむるようなら、所詮、その憧憬は幻想だったということだ。

後悔は先には来ない。：うん、誰かは良いことをいったものだ。

「それでは、レッツゴー！」

私は勢いよく、最初の一步を踏みだした。

入口（後書き）

今回はちょっと短めですね。

次回はいろいろと設定の説明をする予定です。

…ちゃんとまとめられるかな…？

やや不安ですが、頑張ります。

想い

「さて、まずどこから話せばいいのかな？」

そう口火を切ったのは、目の前に座ってお茶をすすする霧也だった。
…と言われても困ってしまう。どこから…と言われても、自分が知っていることなんてほとんどないのだ。一番てっとり早いのは、最初から、ということだろうか。

考え込む私に助け船をだしたのは、やはりというかなんというかなぎさだった。

「聞きたいことがあると言っていただろう？こっちから話すとなると結構な長さになってしまうから、知りたいことだけ聞くことにしてくれないか？」

その言葉に納得する。確かにその方が建設的だ。

「じゃあまず最初に…。あの真っ黒な奴らはなんなんですか？聞いている分には、‘デイズハンター’って呼んでるみたいですけど…」

これが一番わかりやすいだろう。一番知りたい事でもあるし。そう思った。

「んー、やっぱりそう来たかぁー」

と言ってしばらく唸っていた霧也だったが、そのうちにゆつくりと話し出した。

「デイズハンターっていうのは、黒衣の狩人っていう意味で…」

曰く、デイズハンター黒衣の狩人とはある特定の品を狙って‘狩り’と言う名の、品物の奪取を行っている集団らしい。集団とは言っても、どのくらいの数があるのかも分からず、そもそも人なのかも曖昧だ。ただ、共通して言えるのは、彼らがその身にまとう黒いマント。

その黒いマントに隠されたものはあまりにも多く、必然として、彼らの名など分らない。…いつからか、その姿と行いからそう呼ばれるようになったという。

どうして‘狩り’をするのか、その目的も不明だそうだ。

ただ、唐突に品を持つ者達の前に現れ、そして負けるとどこかへ消えてしまう…。

「本当はもっと分かっている事実もあったはずなんだ。だけど、とき時間の経過というのは恐ろしいものでね、大切なはずのことでさえ、今の僕らには伝わっていない」

そう言って、霧也は苦笑する。口調こそ平坦だったが、心底それを嘆いているのだと伝わってくるような言葉だった。隣に座っているなぎさは、黙って霧也が準備したお茶をすすっている。

心なしか重くなってしまった空気に、私は慌てて次の話題を探した。

「じゃ、じゃあ、もしかしてなぎさのうちも…？」

「多分、想像している通りだと思うよ。ウチにも彼らが狙う品がある。君も見ただ日本刀だよ。銘を“夕風”」

デイズハンター

黒衣の狩人と細波家の関わりは、もう何代にも前まで遡るという。名の通った武家であつたらしい細波家は、所持していた刀を求めて現れた彼らをそのたびに退けてきたらしい。

「といっても、よくよく調べてみれば、デイズハンター黒衣の狩人に刀を奪われることを危惧した当時の権力者が、守護のためにウチの家に預けたつていうことらしいけど…」

「け、権力者って…」

またまた、たいそうな語句がでてきたものだ。

心持ち、身を引く私の隣でなぎさがぼやくようにつぶやく。

「そこまでして護られ、加えてもう何百回も敗北を喫しているというのに、あいつらはいまでも現れる。最初は、諦めの悪い奴らだと思っただけだったが、そこまでして手に入れたいものなのだろうな…」

なぎさの言うことももつともだ。なんと言っても権力者が出てくるほどである。それだけの理由があってもおかしくないだろう。

「やっぱり、すごいものなんですか？」

「それも分からない。名刀であることは確かなんだけど、特にこれといって何かがあるわけでもないみたいだし…」

「そうですか…」

語尾を濁す霧也の言葉に納得しかけて、ふと気になったことがあった。というより、なんですぐに尋ねなかったのか、自分でも不思議に思う。

「…ねえ、なぎさ。そういえば、あの刀はどこから出てきて、どこに消えたの？ 私の目がおかしいのでなければ、確か地面から出てきたような気がするんだけど…」

「正確にいうならば、地面ではなく、影だな。消えたのも同じく影の中だ」

そうそうあり得ないことを真面目な顔であっさりと言うなぎさ。私も素直にはいい、そうですねって言ってその話はここで終わり…つてなるわけがない。

特にこれといって何かがあるわけではない…いや、大ありだ。

「…なんで？」

「…私も詳しい事は知らないんだが…」

念には念を、と言うことなのだろうか。当時の権力者という人たちは、腕の立つ者に刀を預けるだけでは飽きたらず、それを俗に言う異次元という所に隠したらしい。それが影の中。

「まあ、今のご時世、銃刀法なんてものもあることだしな。逆に都合がいいんだが…」

「いや、ちょっと待ってよ。そんな簡単で良いわけ？影なんてそこら中にあるじゃない」

「ちゃんと条件が揃わないと刀は取り出せない仕組みになってる。

細波の家の…しかもその中の一握りにしか、夕風は姿を現さないよ」

それまで黙って話を聞いていた霧也が、苦笑しながらも教えてくれた。

それで、大体は納得できたが、その一部が気にかかる。

「一握り？」

「うん。今、夕風を取り出せる人間は、じいさんとなぎさだけだよ」

これには驚いた。てっきり、目の前にいる霧也もなぎさと同じような日々を過ごしているのだと思っていたのだ。

確かめるように隣を見ると、なぎさも首肯する。

「“夕風”は使い手を選ぶ。そういう意味では確かに不思議なのかもしれないけど、なんでも道具はそういうものだろうし…。どうやら僕はお眼鏡にかなわなかったみたいでね。細波の血を持つのは僕の母もなぎさの父親もんだけど、二人とも時代錯誤だっ ていって見向きもしないから。おかげで矢面に立つのは全部なぎさに任せっきりだ」

「じいさんはもう年だしね。三年ほど前にもう引退してる。だから、勝手に持ち去られるってことは多分ないだろうよ」

：どうやら、複雑な家庭事情もあるらしい。まあ、確かに現実離れしたものを相手にして生活するのは大変だろうから、仕方がないのかもしれないが。

簡単に結論づけて、私は一度も口を付けてなかったお茶を頂いた。いろいろ一度に詰め込んで少々熱を持った頭を冷やす。

「聞いていると、本当におとぎ話を聞いているみたいだわ。狩人云々の話もだけど、異次元なんて出会う事なんてないと思ってたから…」
「ウチの事情は確かにそうだが、異次元の入口なんてものは案外近くにあるものだぞ？」

しみじみとつぶやいたのだが、それはすぐになぎさに反論されてしまった。その反論もあまりにもあっさりとしたものだったから、私もすぐに二の句がつけられない。

「……例えば？」

「まずは、私たちも利用している影だな。あとは水面や鏡、木のうろだったり…」

聞いてみれば、確かに身近にあるものばかりだった。だが、それ

が自分の知らない世界につながっているとされてもいまいち実感がわかない。

「何言ってるんだ。里奈も実際異次元に入ってるだろう？」

「へっ!？そうだっけ?…って、あ…」

ようやく思い出した。

いつの間にか変わっていた場所。乾いた風に、舞い飛ぶ砂塵。生きるものの姿のない、何処までも続く赤茶けた大地。…黒衣デイズハンターの狩人を初めて見た場所。

「あそこも異次元だったのね…」

「ああ。あいつらは毎回、狩りの場を異次元に持ち込む。周囲の目に触れたくはないらしいんでね。…こちらも被害を気にしなくてもいいから、やりやすいといえそうなんだが」

それに人の目に触れたくないのはこちらも同じだしな、と言ってなぎさは仄かに笑った。

その笑みがかすかに痛みをはらんでいたように見えて、それが私の興奮を少しだけ冷ました。

「…きつくはないの？」

ポツリとなされた問いに、なぎさは穏やかに応える。

「きつくはないさ。これが私のすべきことだと心得ているしねしね。ただ…」

そこまで言って、なぎさはふつりと押し黙った。そのあとを霧也が引き継ぐ。

「その存在がどんなものであれ、自分の手の中で何かが消えていくのは、やっぱり…哀しいことだと思うよ」

――幕を開けた私の非日常は、ドキドキとワクワクでいっぱい…というわけには、やっぱりいかないのだろう、そう思った。

想い（後書き）

やっと、終わった…

なんか、話が私の思惑と違ってシリアスな方向に…

おかしいな、こんなハズじゃなかったんですけど（汗）

勧誘

乾いた風が吹き抜けていく。

伸ばした手の先も見えないような暗闇の中、わずかに風を揺らめかせて現れたいくつかの影がある。漆黒のローブをまとして立つそれらは、つかずはなれずの距離を保って円を描くように立っていた。

「また失敗に終わったのか…」

くぐもった声。淡々とした様でいて、その中にははっきりと苦みが混じっている。それに答えるのもまた、同じような不明瞭な声だった。

「その様なことは、もう分かり切っていたことだろう。…人の時で数えてもう数百年。一度として我等が勝ったことなどない」

「だが忌々しき細波も衰えを見せ始めている。今、かの宝刀を継ぐのはまだ子供。しかも女子おんなこだというではないか。どうして、我等の狩りがうまくいかないと言うことがあるのだ」

「それでも、未だ手元にそれが揃わないというのも事実。…もう、時はない。早急に手を打つべきだ」

絶え間なく、あちこちから声が上がる。その声の応酬をひとつの影が遮った。

「皆がいうのもまた然り。故に此方も出方を変えねばならぬ。…我等が願望のぞみを果たす為に」

言葉が宙に放たれて消えたとき、再び乾いた風が吹く。いささか

強めの風の後、暗闇の中にあつた影はその姿を消していた……



あんな事があつた後、私はいつ何時、なんじき黒衣の狩人の襲撃があるかもしれないと、なぎさといるときは待ちかまえるようにして、日々を過ごしていたのだが。

「案外のもんぶりした毎日を送っています、ってね」

「当たり前だろう？ そう毎回毎回奴らがきたら、たまつたものじゃない。大体が数ヶ月に一回程度だよ」

机にほおづえをつきながらつぶやいた私に向かって、なぎさが苦笑する。私と会話を交わしながらも、学習道具を片付け続けるその手元は止まらない。そんな彼女の後ろでは、学校への拘束から解放されて、思い思いに騒ぐクラスメイト達の姿があつた。

あれからもう一週間が経とうとしている。

転校早々、華々しいデビューを飾った転校生であるなぎさへの興味はだいたい薄れ。一人、不良筆頭としてのさばっていたアイツもなりを潜めた（聞くところによると、泡を吹いて転がっていたのを大勢に見られたことがよほど堪えたらしい。態度の割には小心者だったようで、驚くほどに縮こまっているとか）噂のタネを無くした生徒達は、やや退屈ながらも穏やかな学校生活を満喫している。

かくいう私も他人が知らないいくつかの事を知ってしまったという以外は、変わらない生活を送っている。少々違うのは、その風景のなかに以前はいなかったなぎさがいるということくらいじゃないだろうか。

「ふう〜ん、そうだったんだ。…ってあれ？ じゃあ、なぎさはいつからその家業をやってる訳？」

「家業って…。まあ、いいさ。“夕風”を受け継いだのは五年くらい前だな。奴らを初めて見たのもそのくらいだったはずだが…」

「五年前って、なぎさ十二じゃん！大丈夫だった訳！？」

「今こうしてここにいるという時点で、大丈夫だったということだな。最初、苦戦したのは事実だが」

付け加えるならば、自然とこういう内容の話が出てくるところも変わったところかもしれない。端で話半分^{はた}に聞いているだけでは、なにかの本かゲームの話だと思うことだろう。

「なあ、一体何の話をしてるんだ？」

ひょっこりと顔を覗かせたのは、楓太。一週間前のあの日から、彼とはことある毎に話をしている。三人で話をしている様子は、教室ではすっかりおなじみの光景になっていた。

「別にたいした話じゃないよ。んで、どうしたの？今日、部活あるでしょ？」

「いや、今日は休み。ウチの部そんなに強くないし、ゆるいしなく。しょっちゅう休みになるって、知ってるだろ？」

ああ、と頷く私と対照的に、なぎさはそうなのか？というような表情を浮かべる。そんな彼女に首肯することで答えを返し、私は再び尋ねた。

「それで、暇になっちゃったふうてんのすけはどうしたの？いつもは真っ先に帰るのに」

「そうなんだよ。今日はちょっとしたお誘いの話」

「「お誘い？」」

重なった二人の声に、楓太はにやつと笑って頷いた。

「そう。肝試しのお誘い」

「……………はあ!？」 「……………」

素っ頓狂な声をあげる私と、沈黙を貫くなぎさ。そんな様子をにやにやと笑いながら面白そうに眺める楓太に、私はつかみかからんばかりの勢いで詰め寄った。

「あんた、何考えてるの？ 高校生にもなって肝試し？ 思いっきり季節はずれの上に、なんで私たちがそんなことしなきゃいけないのかもさっぱり見えない！ ったく、ふうてんのすけの頭の中身は、あまりにも軽すぎて、風に吹き飛ばされちゃったのね」

「ひでえ言いぐさだよなあ。なんだ？ 怖いのか？」

「怖くなんかないわよ！ ただ、あまりにも突拍子のない話すぎて、ものすごく呆れてるだけ！ 第一ね…」

「里奈、ストップ。いろいろ言うのは、話を聞いてからでも遅くないだろう？」

「さっすが、細波。分かってる♪」

グー、と親指を立ててなぎさに突き出す楓太に、私は黙ってチョップを繰り出した。頭を抱えてしゃがみ込む楓太を睥睨しながら、唸るように言う。

「話は聞いてあげないこともないわ。だからさっさと言いなさい」
「お前一体何様だよ…」

ぼやく楓太に、私は無言で右手で拳を握る。小さく悲鳴を上げて逃げ出す楓太と私との間を、なぎさが遮るように立った。

「落ち付けって、里奈。蔵本も早く話を進めてくれ」
「うゝ、分かった」 「よっしゃ、任せとけ」

鶴の一声ならぬ、なぎさの一言で楓太曰くの、肝試しのお誘い、
の説明が始まった。

勧誘（後書き）

ちよつとした話の転換ですね。

前回で書きたかった事のいくつかが書けなかったので、また折りを
見て説明していきたいと思います。

真夜中

不本意だ。

ぶすつとした顔で立ちながら、私はそう思っていた。

辺りはもう真っ暗で、点々と立っている街灯の光で、周囲の様子がぼんやりと浮かび上がっている。時折吹き抜ける風は生ぬるく、肌をなでていく感触にゾワリと背筋が粟立った。

そう寒くもないのに腕を無意識のうちにさすって、私は隣で校門に寄りかかっているなぎさに声をかけた。

「いったい何で、来る気になんてなったの？ てっきり一笑して断るもんだとばかり思ってたのに…」

「さあ、何でだろうな。私にもよく分からない。…あえて言うならば予感、かな？ 蔵本の誘いにのったほうがいいって感じがしたんだよ」

「…もしかして、そっち関係？」

「さあね。ただの取り越し苦労かもしれないし、もしかするとそっちの可能性の方が高い。だけど…注意しておくに越したことはないだろう？」

視線をわずかに上向けてつぶやくように言ったなぎさは、言い終えてからふっと口元に笑みを浮かべた。

「と言っても要は単なる勘だ。気楽に構えていても良いだろうよ」

「気楽に、ねえ…。肝試しをどうやって気楽にやれっていうのよ…」

なぎさと同じように校門にもたれかかりながら、私は腕を組んで

ひとつため息をついた。

楓太が持ち込んできた話とは、なんということもない普通の肝試しの話だった。部活の仲間と一緒にやろう、という話になったらしい。

「なんでまた急にそんな話になったのよ？」

「なんでって言われても…。ノリで？」

「あっ、そう……」

ガツクリと肩を落とす私の隣で、なぎさが訝しげに尋ねる。

「だが、なんで私たちを誘うんだ？部活の仲間内でやるのだろうか？」

「そりゃ、人数いた方が盛り上がるだろ？男子ばかりでやったってむさ苦しいばかりだしさ。どうせなら女子も誘おうぜ、っていう話になったんだよ」

「そうなのか…」

納得した風情のなぎさだったが、私は楓太を疑いたったぷりの目で見つめる。

いくらだいぶ収まったとはいえ、なぎさへの興味・関心は未だ高い。部活の仲間に請われて、楓太が誘う口実をとってつけたに違いないのだ。

じいーと向けられる視線に耐えかねたのか、そうでないのかは定かではないが、楓太はふいつと視線をそらす。加えてわざとらしく口笛まで吹いていた。

私は嘆息する。問いつめることも出来ないわけではなかったが、無駄に気力・体力を消費するだけなのでやめた。

「どーでもいいけど、私は…」

「私は参加するよ」

「参加…って、えっ!？」

「まじか!？よっしゃー、人員確保〜!」

小躍りする楓太と、啞然とする私の隣で、なぎさは涼しい顔をしている。わずかに笑みをたたえたその表情の裏の真意が読みとれなくて、困惑する。

「本気？なぎさ」

「ああ。面白そうじゃないか。肝試しなんてやったことないからな」

なぎさの言葉はあっさりとしていた。一気に脱力する。…ああ、目眩が…

そんな私に追い打ちをかけるように、楓太が明るい声で宣言する。

「じゃあ、今夜十二時に校門前に集合な!楽しみにしてるぜ!」

じゃあなあ、と言うだけいっておいて、楓太は教室を駆け出して行った。引き留める間もなく、私たちは教室に取り残される。

「……私、参加決定…?」

「どうやら、そうみたいだな」

呆然とつぶやく私の肩を、なぎさが慰めるようにポンポンと叩く。私は盛大にため息をついて、勢いよく机に突っ伏した。

……それが八時間ほど前のこと。

「おー、お待たせー」

ようやく、待ち人が現れた。

後ろに何人かを引き連れている。だが、その人数は思ったより少なかった。

「あれ？あんたの部活ってこんなもんだっけ？」

「うんにゃ、違うぜ。ただ、参加するっていった奴らがこんなもんだっただけ」

「里奈く、なぎさも、やっほく♪」

先頭をきって歩いてきた楓太に声をかける。首を振る彼の後ろから、見知った顔が覗いた。

「鈴鹿？なんであんたがここに…？」

「うちもクラスの男子に誘われたのよ。二人が来るって言うから、じゃあ私も、ってね」

「それはいいな。ますます楽しくなりそうだ」

「でしよでしょ？」

ウィンクをしてみせる鈴鹿に、みんなが小さく笑みを零す。

見回してみると、女子は私となぎさ、鈴鹿の三人。男子は楓太を含んでたった五人だ。人員の確保と言っていた楓太の言葉は、あながち嘘ではなかったらしい。

「よし、じゃあ、全員がそろったところで、レッツくじ引きタイム」

しきり役は楓太のようだ。

割った割り箸を手にとって、ウキウキとした調子で楓太が言う。目の前にそれを突き出されて、なぎさ達と顔を見合わせた。

「1から4まで数字をふってある。同じ数になった人と二人ペアになって、校舎を回る。それでいいだろ？」

「「異議なくし」」

「よし、じゃあ一本ずつひけ」

一番近かった者から順に引いていく。

せーのっ、と言って、女子三人で一斉に番号を見せ合う。引いた数字は、いつそ見事な程にバラバラだった。

「あっちゃー、私一番」

「こっちは三番」

「私は最後だな」

上から鈴鹿、私、なぎさの順。ちなみに楓太は私と一緒にだ。

「なんだ、竹下とか」

「なんだとはなによ、失礼ね。嫌なら帰るわよ。私は別に肝試しがしたくて来た訳じゃないんだから」

「まあまあ、そんなこと言わない。せっかく来たんだし、それにあんまり騒ぐと響くわよ」

少々荒くなった口調で言うと、鈴鹿にいさめられた。確かに今は真夜中だった。：ちよつと反省。

「順路は簡単。玄関から入ったら、一階を歩いて奥の階段を登る。渡り廊下を渡って特別教室棟に入ったら、おなじみの音楽室と理科室の中に入る。教室の中にマッチが人数分置いてあるから、ちゃんと持ってこいよな。終わったら三階に上がって廊下を歩いて本階段を下りて終了。途中、電気をつけるのはなし。懐中電灯、ある

だろ？使うのはそれだけな。はい、質問は？」

「特になし」

「大丈夫だ」

「オッケー」

三者三様に答える。他の男子生徒もそれぞれに頷いていた。それを確かめるように周りを見回していた楓太はひとつ頷く。

「よっしゃ。じゃあ、ぼちぼち行きますか」

私は黙って校舎を見た。見慣れた建物。だが、今それは闇の中に沈んで、よそよそしさを醸し出している。この時間、人氣が無いのは当たり前だが、昼間の様子を思い出してみるとそれはいっそ、不気味ささえ感じる。

不意に見据える先の闇が、ひるがえる黒衣の狩人デイズハンターの黒いマントに重なった。

「里奈？」

ひっそりと声をかけてくるなぎさに、わたしは何でもない、と首を振った。

闖入者

カッン、カッン、カッン……

真っ暗な廊下に足音が木霊する。懐中電灯の明かりで進む分には支障がないものの、やはり暗い中を歩き続けるのは少々気味が悪い。たとえそれが見知った場所であっても、だ。

「だいたい昼間と夜じゃ雰囲気違って当たり前なんだけどさ…」

「…なに一人でブツブツ言ってるんだよ…」

あきれた声で楓太が言う。それに何でもないわよ、とだけ返して私はひとつ息を吐き出した。

ただいま私たちは肝試しの真っ最中だ。順番が三番目といっても、そうたいした人数じゃないし、そうそう長引かせるつもりもなく、開始からそう時間をおかずに私たちは校舎に足を踏み入れていた。

懐中電灯を携えて、先をゆくのは楓太。私はその斜め後ろをついていく。今は階段に差し掛かるうかという所だが、ここまでそう会話を交わすこともなく行程の約4分の1を終えていた。

「さて、この際だからちゃんとこの肝試し開催の理由^{わけ}を聞いておきたいんだけど？」

「…なんだよ。ちゃんと行っただろ」

「ノリだっというアレのこと？ 本当にあんなもので終わらせるつもり？ ちょっとお粗末すぎるんじゃないかしら」

何でもないように切り出した私に、楓太は不信感丸出しの態度で応対した。それを一蹴すると、構わずに言葉を重ねる。

「ふうてんのすけは確かにお調子者ではあるけど、何も考えずに行動するような向こう見ずではないはずよ？別に何かがあるでしょう？」

「……何それ。もしかして褒めてくれてる？」

「ただの客観的な評価よ。ホラ、はぐらかさないでさっさと答える！」

せつつくように言うと、やれやれというように楓太が手を上げた。

「全く、お前って変なところで鋭いよな」

「褒め言葉として受けとって置くことにするわ。それで？」

再び促すと、楓太は軽くため息をついて話し始めた。

「ちょっとした尻ぬぐいを引き受ける羽目になったんだよ」

「……………誰のよ？」

「細波が助けたあの男子生徒だよ」

「……………ああ。あの気の弱そうな」

楓太の言葉に触発されて、思い浮かんだ顔がある。まだ一週間そこそこしか経っていないのだが、気持ち的にはもう大分昔のことなので、思い出すのに時間がかかった。

細い体つきをした青白い顔の真面目そうな男子生徒だった……ハズ。

……ああ、ゴメンよ、記憶の中の男子生徒。多分大幅に想像が含まれているが、多分そう大差は無いはずだから問題ないだろう？……いや、ある。

申し訳なさを感じつつも、ぼんやりと霧がかかったような男子生徒の背格好を脳内で思い浮かべつつ、楓太の話に耳を傾ける。

「アイツ頭は悪くないんだけど、お前の読み通り気は弱いんだよ。
残念なことに、これは素行の悪い奴らにとっては格好の標的ターゲットなんだ
よなあ」

「……ああ、なるほどね」

事情が飲み込めた気がする。

要するに、だ。無理難題を押しつけられたその男子生徒が、頼れる(?) 兄貴分である楓太に泣きついたのだろう。

「まったく、巻き込まれるこっちはいい迷惑よ」

「そういうこと言うなって。不幸なのはアイツも一緒」

「それより、なんで当の本人が来ないのよ?」

「アイツの親御さん、キビシーんだよ。夜中に抜け出すなんて言語道断」

そうこう話しているうちに渡り廊下にたどり着く。目の前にのびる特別教室棟は、今まで通ってきた廊下よりさらに凄みを増して、不気味だった。

「うげえ……」

「変な声を出すんじゃない!」

げんなりとした声を発する楓太を軽くはたく。

まったく、こんな声を出すくらいなら、引き受けなければいいものを。

胸中で毒づきながらも、指示された通り用意されているというマツチを探す。その過程で懐中電灯に照らし出されたものは早々に頭の中から追い出して、搜索を続けるうちにそう時間をおかずしてそれは見つかった。

「よし、発見」

「これで半分はクリアね。後は戻るだけ……」

「うわあああああつつつつつ！！！」

音楽室、理科室共にノルマをこなし戻ろうとしたその時、辺りを満たしていた静寂を破って絶叫が響き渡った。それは壁に反響しあって本来の声とは異な^{おと}って耳に届く。だがそれは、たしかなぎさと行動を共にしていたはずの男子生徒の声だった。

「沢辺！？」「つつ！なぎさっ！」

二人して一斉に友人の名をつぶやく。

見事に肝試しを満喫しているのか……。恐怖のあまり、何かを勘違いして悲鳴を上げたのかも……。……。だが、それにしてはいささか毛色が違う。

楓太と顔を見合わせ、そのまま教室を飛び出した。

「来た道戻るぞ！あいつらは最後だろ？まだ学校に入ったばかりのハズ……」

「言われなくてもそのつもりよ！取り越し苦労だといんだけど……」

半ば叫ぶようにして会話をしながら、今来た廊下を疾走する。階段を転びそうになりながらも一段飛ばしで駆け下り、視界を遮る壁の向こうに顔をだすと、床にへたり込むひとつの人影と、左手で右腕を押さえその人影をかばうように立つもう一つの人影があった。

「なぎさっ！」

声をかけると、立っていた人影……なぎさはホッとした表情かおをした。

「里奈……」

「おい、沢辺！どうしたんだよ！？」

へたり込む男子生徒に駆け寄り、楓太が膝をつく。覗き込んだその生徒の顔は、闇の中にあっても分かるほど真っ青だった。

「わ、わかんねえよ。普通にここ歩いてたら、真っ黒い奴が急にでてきて…」

それを聞いて、確かめるようになぎさを見る。険しい顔つきをした彼女は肯定するように頷いた。

「見間違いの類ではないと思う。何かはよく分からないが、念のために撤回することを提案するよ」

そう言いながら、意味ありげにこちらをみてくるなぎさの様子に合点がいく。どうやら彼女の予感、悪い方に当たってしまったらしい。

それを言わずに、遠回しにこの場を離れるように促すのは、事情を知らない楓太達がいるからだろう。確かに下手に関わり合いになるよりは、全く知らない方がいい。両極端だとは思いますが、事実その方が身のためだ。

なぎさの言葉と尋常ではない友人の様子に、楓太は少し考えただけで肝試しの終わりを告げた。

「とりあえず、他の奴らと合流だな。二組目の二人とは玄関口で落ち合えるだろ。一組目の奴らは…もう校門かな？」

楓太の言葉に、軽くうつむいて考え込んでいたなぎさが、ハツとしたように顔をあげた。

挑発

突然、パツと勢いよく走り出したなぎさに、私たちはすぐに反応出来なかった。

だが、呆然と見送るだけというのを許せるわけもなく。

「ちよっ！ちよっと待ちなさいよ、なぎさ！」

「どうしたんだよ、細波！」

私たちが後ろから声をかけるのを見ながら、沢辺がボソリとつぶやく。

「……おい、止めた方がいいんじゃない……」

「なんでだ？どうせ行き先は校門だろ？」

首を傾げる楓太に沢辺はなおもボソボソと続ける。

「いや……、たぶんなんだけどよ。細波さん、右腕怪我してるんじゃないかって……」

「なんですってっ！！」

振り向きざまに大声で叫んだ私に若干ひきながらも、沢辺は懸命に言い募った。

「いや、俺もちゃんと見た訳じゃないぜ。ただ、さっき言った真っ黒い奴が持ってた長い棒の先が細波さんの腕にかすったような気がしたし、その後から彼女、右腕をずっと押さえてたから……」

最後まで聞くことなく、私は黙って身を翻した。なぎさの背中を追って走る私の後ろから、楓太の声が追いかけてくる。

「俺らは上の階にいるだろう奴らと合流してから行くから！そっちはよろしく！」

「了く解っ！」

大声で怒鳴り返して、懸命になぎさとの距離を開かせまいと走る。

（まったく、なんで私は運動音痴なのよー！！）

そんな私の胸中の叫びなどが、なぎさに届くわけもなく。

もともとあった私となぎさとの距離は徐々に開き、私が生徒玄関にたどり着いたときにはもう、なぎさの姿はガラス張りの扉の向こう側だった。

「鈴鹿っ！校門から外に出るなっ！」

いつものなぎさに似つかわしくない、取り乱した声が静かな夜闇に木霊する。その声に振り返る驚いたような二人の顔が朧気に見えた。

「えっ？なぎさ……？」

「あれっ？細波さんってさっき入ったばかりじゃあ……」

そんな二人から校門はもう目と鼻の先だった。もうあと二・三歩で敷居をまたいでしまうだろう。

……間に合った……

ホッとしたのもつかの間……というよりそんな間もなく、とてつもなく最悪な状況が私の目に入ってきた。

こちらを振り向いている二人の後ろ。丁度、門の両脇にたてられた柱の間の空間が、奇妙に揺らめく。何もあるはずがないその場所から、黒い物がのびてきた。黒色の槍の鋭利な穂先が、街灯のわずかな灯りをうけて鈍くきらめく。

：黒衣デイスハンターの狩人の登場だった。

「鈴鹿、走って！早く！！」

「あれ、里奈まで……。どうしたのよ？」

未だに状況の把握が出来ていない鈴鹿達は、首を傾げながらこちらに向けて足を踏みだす。だが、その倍ほどの速さで、現れた黒衣デイスハンターの狩人のマントに隠れた腕が彼女たちに向かつてのびる。

そこでようやく追いついたなぎさが二人の腕をまとめてつかむと、そのまま力一杯引つ張った。

「きゃあっ！」 「うおっ！」

「校舎に向かって走れ！入ったら、出ないでじっとしてるんだ！」

突然引つ張られて体勢を崩した二人に口早になぎさはそう告げると、今度は校舎側に向かって押した。その瞬間、鈍い音と共にその場からなぎさの姿がかき消える。

「えっ！？ちょっと、なぎさっ！？」

「お、おい、何なんだよ、こいつ……」

地面に倒れ込み、起きあがろうとからだを反転させた鈴鹿達が、ようやく自分たちが置かれている状況に気が付く。

啞然と目を見開く彼らのところにたどり着いた私は、容赦なく二人を立ち上がらせにかかった。

「ほら、早く立って校舎に入って！先にいっとくけど、これはどっきりの類ではないわよ。現実逃避して、逃げ遅れないようにしてちょうだいね！」

「ま、待ってよ。さっきなぎさが……」

「なぎさの方は私が引き受けるから！二人はさっき言った通りにして！説明は多分後でするから！」

一方的にまくしたてて、二人を校舎側に押し出す。そうして振り返ると十数メートル離れた先で、地に伏したなぎさが立ち上がるうともがいっていた。

「なぎさっ！」

「見上げたものよの。己を盾とするか」

駆け寄ってなぎさを助け起こす私の後ろから、音声が響いてきた。キッと私は出来る最大限きつい視線で相手をにらみつける。にらみつけられた相手――黒衣の狩人は、奇妙に揺らめく空間から、上半身のみを覗かせてこちらに顔を向けていた。

「残念なことだ。この度は、お客人を招待しようと考えたのだが」

「私も残念だよ。無関係者は巻き込まないというのが、通じる相手だと思っていたのに」

淡々と紡がれる狩人の言葉に、なぎさが精一杯の皮肉を込めて返答する。私の手を借りて立ち上がった彼女からは、先ほど鈴鹿達をかばって吹き飛ばされた事への後遺症は見られない。だが、わずかに顔をしかめて押さえる右腕からは、血がにじんでいた。――これが先ほど、沢辺という男子生徒が言っていたものだろう。

「それならば、そちらがこちら側を見誤ったということだろう。今

まではそなた達、細波の者を相手にするだけで事足りた。……だが、
そうも言ってられなくなったのでな」

「……切迫している理由は知らないが、そのために周囲の者達が被害を被るのはゴメンだな。相手なら、今まで通り私が引き受ける。
今すぐに他の者からは手を引け」

「そちら側の言い分を、我等が聞き入れる義理はないだろう。なに
より、こうしたほうが正面から応じるよりもよほど効果がありそう
だ」

「……下劣な……。見損なったよ、デイズハンター黒衣の狩人」

地をはうような低い声でいいながら、にらみつけるなぎさの視線
を軽くいなして、狩人は哄笑おとともとれるような声をたてる。

「それは、それは……。まあ、コメント反論はしないこととするよ。あなが
ち、間違いではないのだから。……さて、お客人は招待出来なかつ
たが、会場の準備は出来ている。如何する？」

そう言いながら、デイズハンター黒衣の狩人はズブズブと音が響いてきそうな様
子で、背景へと溶け始める。表情、様子が読めない真っ黒なマント
の下で、相手が笑っているような気がした。

「戯れか？意味のない事ばかり聞くものじゃないぞ？」

挑むような口調で言って、なぎさはすぐに行動を起こした。半分
裂けている服の右腕部分を勢いよく破き、手早く口と左腕を使って
傷口を縛る。

その時間はおよそ十秒。私が手伝う暇もない。
そうして、支度を終えたのだろうなぎさは、真っ直ぐに揺らめく
空間へと地を蹴った。

「私は、売られた喧嘩は全て買う主義なんだ」

幕引き

『私は、売られた喧嘩は全部買う主義なんだ』

格好いい決め台詞だと思う。：私の個人的な感想だが。

事実、それを口にした彼女は凛々しくて、勇ましくて、堂々として：本当にその言葉が似合っていた。端で見ていた私が惚れ惚れと
するくらいに。

だけど、此処はきらびやかに飾られた舞台の上ではない。綿密に
構成された物語を彼女は演じている訳でもない。どんなに浮世離れ
していようと、私が見て、聞いているのは現実。

傷を負いながら、激しくなるだろうと予想される戦いの中に身を
投じていくなぎさの姿は、無謀、とも呼べる物だった。



「なぎさっ!？」

私がそう叫ぶのと、なぎさが校門を駆け抜けるのはほぼ同時。次
の瞬間には、なぎさはその姿を消していた。夜の闇に拡散する私の
声に答えるものはない。

どうしようもなくムシクシヤして、腹いせに地面を蹴りつけた。

「っっ! いったあゝっ!」

悲鳴を上げてしゃがみ込む。蹴りつけた足がジンジンと痛んだ。
予想もしない突然の痛みに目の端に涙が浮かぶ。……やるんじゃない
かった。

だが、その痛みのお陰で冷静な思考回路が戻ってくる。

だんだんと引いていく足の痛みを、頭の片隅で受け止めながらも、そのほかでは今後の自分の身の振り方を必死に模索していた。

（鈴鹿達の方はきっと大丈夫。理由は分からないけど、黒衣の狩人^{あいつら}はこっちの方までは自由に出てこれないみたいだし…）

さっきの肝試しの際に出てきた時も一瞬の出来事だったようだし、なぎさと言葉を交わしていた時も異次元との門^{ゲート}となるあの場所から動くことはなかった。それらの事を考慮すれば、鈴鹿達に被害が及ぶことはないと思う。

そうなるとやはり、心配なのはなぎさの方だ。普通に狩人達を相手にする分には問題はないだろうと分かっているけれど、今の彼女は怪我をしている。あっちの目的はなぎさの操る日本刀らしいから、故意に傷つける事ばかりはしないだろうけど、それでも不安は残る。

（ええい、面倒くさい！）

せっかく戻ってきた思考回路を、早々に放棄する。思い立ったが吉日。頭に浮かんだ方法を早速行動に移すべく、サッ「と私は立ち上がる。

息を深く吸って、視線を向けるは校門の方角。今もなお、そこには妖しく揺れる空間^{ばしよ}がある。そこを目指して、私は勢いよく走り出した。

（気になるんなら、行って見てみるしかないじゃないの！）

半ば自棄気味に心の中でそう叫びながら、私はそこを潜り抜けた。

体験するのは二度目の感覚が通り過ぎる。

ピチャン……

あまり心地よいとは言えないその感覚の後に、私が感じ取ったのは足下で水がはねる音だった。

視界は…最悪。辺りを白く、濃い霧が覆っていて、伸ばした手の先も見えないぐらいだ。細かな水があつという間に私の服を濡らしていく。

異次元というのは、毎回その場所を変えるらしい。

(なぎさは……)

見えないのを分かっているながらも周りを見回す。そんな私の脇を、不意に疾風が通り過ぎた。

一瞬だけ、霧が晴れる。目に映ったのは、ひるがえる黒いマントと閃く銀光。

キイイイイイイイン！

鳴り響くのは、金属が触れ合う甲高い音。ビリビリと空気が震え、それが私の肌まで伝わってくる。

近々と接近したなじみの気配は、それを境に遠ざかっていく。あつという間の出来事は、それがあつたことさえ朧気だ。

気配を追って振り返っても、そこに見えるのは辺りを覆う白い霧ばかり。

「荒御風・乱!!」

と、思っていた所になぎさの凜とした声が聞こえてきた。少し置いて、襲ってくる強烈な風。

離れた場所から唐突に湧き起こったその風は、その場所から円を描くように吹き渡り、だんだんとその勢力を拡大していく。風が通りすぎたその先から霧が晴れていくので、その動きがよく分かった。

「つて、マズッ!!」

気が付いたらそれは私の目の前に迫っていた。そう気づいてからすぐに踵を返して走り出したのだが、時すでに遅し。あっという間に風に追いつかれて、あっけなく私は吹き飛ばされる。

地面を転がること数十回。もう服はびしょぬれだ。

出来る人ならこんな場面で受け身を取ったりするのだろうか、残念ながら私は出来ない身。打ち付けた身体があちこち痛む。ただ、前回みたいに擦り傷を作らなかったことだけが幸いか。

特にひどく打ち付けた右肩を押さえながら、私はよろよろと立ち上がる。そうして顔を上げて見た先には、先ほどとは一変した風景が広がっていた。

辺りに厚くたれ込めていた白い霧は、ある地点を中心とした半径三十メートルに渡ってもうない。地面にはあちこちに水たまりがあり、そうでなければ沼地にあるような植物があちこちに点在している。

その中心。

そこにはいくつかの影があった。

「……全員、吹き飛ばせたと思ったんだがな……」

「あまり、自分の実力を過信しない方がよいことだろう。良い経験になったのではないかな? ……まあ、それを生かす機会が今後、巡ってくるとは思えないが……」

手にした刀の先を地面に突き立てて支えにしながら、なぎさは肩で息をしながら立っていた。対する黒衣の狩人達^{デイズハンター}は、悠然とした態

度でその周りを取り囲んでいる。黒光りする彼らの槍に対して、なぎさの刀がいささかくすんで見えた。

「勝利宣言か？…少々、気が早いと思うぞ？」

「そうでもあるまい。この状態を見て分らないか？数には圧倒的な差があり、おのおのの状態を見ても此方の優位に揺るぎはない。状況を冷静に分析できるのも、必要な技術だと心得るがいいさ。…もし素直にその“夕風”を渡せば、今ならこれ以上は何もせずに引き下がるが？」

「…それは、出来そうにないな」

「そう言うだろうと思ったがな。では、幕引きだ」

その言葉を合図にするように、狩人達が一斉に槍を掲げる。なぎさも自分の刀を構えるも、彼女自身その動作に意味を見いだせないようだった。

「“爆碎”」

振り下ろされた槍が地面に突き刺さる。抉られた地面から徐々にひびが入り、中心にいるなぎさへとはしる。次の瞬間、大きな地響きと共にその場所が陥没した。

願望

立っていられなくなるほどの震えが足下を襲う。

悲鳴を上げるより何より先に、私は地面に手を付いた。それでも体は安定しない。半ば這いつくばるように地面に伏せて、揺れが収まるのを待つ。

土煙は立たない。その代わりに視界を覆うのは、再び立ちこめ始めた霧だ。なぎさが起こした風で追い払われたはずのそれらは、そろそろと明瞭な視界を浸食し始める。

(……なぎさ……?)

慌てて視線でなぎさを探す。

自分は気配を読んで行動するなんという器用な真似は出来ない。視覚が生きているうちになぎさを見つけてしまわないと。

上げた視線の先には、大きくへこんだ地面。底は：見えない。ひび割れた土が姿を覗かすだけ。そこになぎさの姿はなかった。

(どっかに避難してる……!?)

わずかな期待が胸を照らす。もしそうであるならば、状況は大分変わる。自分たちの有利へと天秤が傾くことはありえないが、どうしようもないという事はないはずだ。

だが、それは次に目に飛び込んできた光景で、粉々にうち砕かれた。

「ようやく、というところだな……」

聞こえてきた不明瞭な声に、私は慌ててしゃがみ込んで息を潜める。異次元に私がいることはきつともうばれているだろうが、奴ら^{この場所}がもし視覚で物を見ているのなら、この霧で正確な位置までは分からないはずだ。

さつきまでは忌々しかった霧が、今は有り難かった。

半ば息を止めるようにしながら、目だけを凝らす。ぼんやりとした霧の中で、うごめく狩人^{くろう}とチラッと瞬いた輝きが見えた。

「これを求めて、人の世で言えば早数百年か……。我等にとっても長いものだ」

「最後まで女子一人に手こずらされたが、過ぎてしまえば一興か」

「なんにしても、ようやく得た宝刀^{モノ}だ。時もない。早々に次に移ったほうが良からう」

そう言って、最後に言葉を発した黒衣の狩人^{デイズハンター}が手にした物に、私はハッと息をのんだ。霧の中、どこからか差し込むわずかな光を反射する、刃こぼれひとつない刃^{やいば}。その白い輝きは、狩人達が身にまとう黒いマントと相まって、一層目を惹く。

なのに、私が以前見たときに感じた、なぎさと共に狩人達を相手にするときが発する、威圧されそうな圧迫感^{プレッシャー}は、その片鱗も感じ取れなかった。

夕風^{コレ}を護るのは私の定めだ、そう言っていたなぎさがそれを易々と手放すわけがない。となれば、今なぎさはそうせざるを得ない状況に陥つてると言うことだ。つまりは…。

大きな穴を開けた地面を見やる。以前、テレビか何かで見た隕石が落下した地点のような様相。なぎさはその丁度真中にいたはずだ。どうなっているかなんて……想像したくない。

背筋をなでいった寒気に身体を震わせる。水で濡れた服は体温を奪い、また日の光が差さないので確かに寒い。だがこれはそれは違うものだ。

「潜り込んだ客人の方は？」

「捨て置け。どうせ何も出来ないのだ。それに…すぐに境などなくなる」

向こうの方からは、まだ狩人達の会話が聞こえてくる。内容から察するに、やはり私の存在は向こうに伝わっているらしい。

（……ええ、ええ。どうせ無鉄砲に首を突っ込んだ取るに足りない存在ですよ）

あんまりといえばあんまりの言葉に、カチンとくる。でもそれが逆に良かった。怒りに火がつき、凍えて縮こまっていた身体に、少し熱が戻ってくるのが分かる。

（今に見てなさい。なにやろうとしてるのか知らないけど、絶対にぶちこわしてやるんだから！）

なんとも単純な感情だ。自分でも理解している。それを好ましく思った事なんてなかったけれど、この場に限っては許すことにした。なにより、この気持ちがあれば行動できそうになかったから。

（まず、なぎさ！どこにいるのよ！）

姿の見えぬ友人を捜して、私は気づかれないようにそっと足を踏みだした。

◇
◇
◇

時間じかんはいつ？

――今すぐに。もう何百年という時間を過ごした。あの時望んだ物は、何一つとしてこの手に入ってはいない。そうして、与えられた猶予もまた、消え失せようとしているのだから。

舞台ぶたいは何処？

――この場所で。いくら場面が変わろうとも、ここが閉じた場所であることには変わりがなく。我等には他に行く場所がない。此処以外に、存在いする事を許される場所がない。なればこそ、此処を始まりの地としよう。

何を以て？

――今手にするは、古来よりの宝。此処にあつて此処になく、現あら世ちよにあつて、現世にない。次元の狭間に身を置いて、誰もが持たぬ力を宿す。力を分け与えられた、選ばれし一族より奪い去りし物。望みを果たすための鍵として、何よりも先に求め続けていた物。今、ようやく手元に揃った。

……望みとは何？

――我等が此処に存在を、身体カタチを、意志を持ったその日から、その望みだけを追い求め続けた。それを為すために手段を探し、手段を為すために黒衣デイズハンターの狩人として品を狩った。我等が求む唯一の願望のぞみ。現世と此処を隔てる壁。我等を此処に閉じこめる檻。取り払いた、消え失せて欲しい忌むべき対象。それを無くして我等は現世へ踏み入れる。踏み入れて、我等は思うがままに振る舞うのだ。現世と此処は混じり合い、全ては混沌とした世界ばしょへと変わる。混じり合ったその場所で、我等は至高の存在として君臨する！

霧の中でうごめく黒。

刀、鏡、鈴を持った三人の黒衣デイズハンターの狩人を中心として、黒い影が集

まる。そうして刀を高くかざした一人が悦びの音を発した。

同胞よ！今こそ我等の願いを果たそうぞ！

地を伝う、くぐもった声が重なった。

賭け

ジャリ、と足下でした音に鼓動が跳ねる。それはちよつとしたものだったが、今の私には一大事だ。

そうっと耳を澄ませても、なんの反応もないことにホツとする。霧で視界が塞がっているし、またアイツらがいるのはだいぶ上のハズなので、目で様子を確認することはできない。でも、雰囲気的に向こうは盛り上がっているようなので、そんなに心配することも無いのかもしれない。

そう結論づけて、私はまたそろそろと移動を再開した。足を伸ばして足場を見つけると、ゆっくりと体重を移動させてそこにのせる。その繰り返し。

気づけば、さっきまでいた場所もう手が届かないほどに遠い。そうしてまでいるのに、底はいつまで経っても見えなかった。

なぎさがいるとしたらここしかない、そう思って来てみたは良いが、その穴は想像以上にでかかった。大体の見当だけでもつけられたら良かったのかもしれないが、制限された視界の中ではそれも難しい。とにかく下まで降りようと腹をくくったはいいものの……

（どこまで行けばいいのよぉー！！）

もう内心半泣き状態だ。

断崖絶壁と言ったら言い過ぎだが、坂を下りるのは訳が違う。それにただ力任せに崩されたものと同じなので、なんと言っても足場が悪い。足をのせた場所が崩れるのも冷や冷やものだが、その時にどうしても立ってしまう音も心臓に悪い。

(でも、なぎさを捜さないと……)

デイズハンター

黒衣の狩人がなにかしでかそうとしていることは、本能的に分かる。早いうちに止めなければやばそうなことも。

でも何をするにしても、なぎさを見つけることが最優先。

私自身で何とかなるようなものではないし、それに…姿を見せない友人が心配だった。

(どこにいる…?)

慎重に、それでも動きは出来るだけ敏速に。

何処で終わるともしれない穴を下る。慣れない岩場はなけなしの体力を容赦なく削り、確実に疲労を蓄積させていく。視界が利かない中での前進は、それだけ精神力を摩耗させる。

そんな悪条件が重なったなかでは、さらに悪いことが重なるものなのだ、私は身を以て思い知る。

あつ、と思ったときにはもう身体が傾いていた。大丈夫だと思って踏んだ石がちゃんと固定されたものではなかったのだ。ガラン、と音をたてて石が転がる。支えを失って、ガクンと風景が縦にぶれた。

体勢を立て直すことなど出来なかった。状況をしっかりと理解することも出来ないままに、私は斜面を転がり落ちる。あちこちに受ける衝撃を殺すのに手一杯で、自分がたてている音のほうは今はいく耳に入らない。

(さっきまではあんなに気にしてたのに、変なものね……)

頭の隅でそんな想いが浮かんで、消えた。

ズシャー、という音を最後に動きが止まる。何度も転がったせい

なのか、頭の中がぐるぐると回っている様な気がして、気持ち悪い。

「うゝ」

倒れ込んだ体勢のまま、身体を丸めるようにして唸る。しばらくそうしているうちに、頭の揺れは収まってきたが、代わりにひどく打ち付けた身体の内側で、痛みが存在を主張し始めた。：明日辺りには、あちこち青あざばかりになっているかもしれない。

（まあ、それもちろんどこから出られたらの話だけだね）

立ち上がる。

うじうじしていたって何も始まらない。盛大に音を立ててしまったことだし、さっさとやることをやってしまおう。：自分の切り替えの速さ（もしくは脳天気さだが）に感謝したくなる時だった。

：あるいは、そんな行き当たりばったりの私に、誰かが情けをかけてくれたのかもしれない。

「なぎさっ！どこ！？」

「：里奈？」

答えを期待せずに言った呼びかけだったので、逆に返事があったことにびっくりする。あまりにもびっくりしたので、見えないと分かっているながらも周りを見回してしまった。

「嘘！？どこ、どこにいるの？」

「たぶん後ろだ。あと：五歩分くらい」

言われるままに回れ右をする。そのまま慎重に歩数を数えながら歩く。1：2：3：4：5。

そこまで数えたところで、前に伸ばした手がざらりとした岩肌に触れた。

「あれ？」

「間違っではないぞ。ここにいます」

触れた岩の向こう側から、聞き慣れた友人の声がある。続いて、どんと岩を叩く振動が伝わってきた。

「なんで里奈がここに？」

「追っかけて来ちゃったのよ。役に立たないのは分かってたけど、あそこで待ってることも出来そうになかったし」

「本来なら、来るべきじゃなかった、と言うところだが……。助かったかもしれない。一人じゃどうしようもなさそうだからな」

苦笑混じりの声でなぎさが言う。声音ははっきりしているから、あれから大きな怪我などはしていないようだ。そのことにはちよつとほつとする。

だが、別の事実に気づいてざつと血の気が下がった。

「ちょ、ちよつとマジで？出られないの？」

「情けないことだがそうなるな。まあ、あの中にいてつぶされなかった分、運が良かったと言うところなのかもしれないが……」

なぎさの声を聞き流しながら、私は近場の岩をあちこち動かそうと試みる。押したり、引いたり、どかしたり、あるいは蹴りつけたりして。

ほとんど動けるスペースがない、と言いながらも中で動きそうな岩の場所を指示してくるなぎさの協力も相まって、なんとか顔ぐらの穴を作り出すことに成功する。

「だ、ダメ…。これが限界…」

力一杯押してもびくともしない岩に疲れ果てて、私はずるずるとその場に座り込んだ。すると、ちょうど目の前にこじ開けた穴がく。霧でぼんやりとかすみながらも、なぎさの顔が向こうに見えた。

「ああ、あとは別の手を考えるしかなさそうだな…。…里奈、夕風はどうしてる？」

「向こうの手に渡ったわ。なんだか知らないけど、かなりやばそうだよ。そっちに夢中でこっちを気にしていないみたいだからそれは有り難いけど…」

そう前置きして、私は自分が見てきたものを出来るだけ詳しく話す。私には意味が分からないものばかりだったが、なぎさはある程度理解できたらしい。話し終わると、ひとつ頷いた。

「そうか…。じゃあ、まずやるべきなのは夕風の奪還だな」

「奪還って…。それが出来たら確かに良いだろうけど、…出来るの？」

「賭だけだな。里奈、懐中電灯もってないか？」

「え？懐中電灯は学校に置いて来ちゃったけど、ペンライトだったら…」

「十分だ。貸してくれないか？」

なぎさに言われるままに、ポケットに入りっぱなしになっていたライトを取り出す。キーホルダーになるような小さな物で、辺りを照らすのにはどちらかというと不向きだ。

「どうする気？」

「すぐに分かるさ。ここまでされたんだ、十分なお礼はさせてもらわないとな」

穴の向こうで、闘志を失わない瞳をしたなぎさが不適に笑った。

反撃

鏡。

行く手を照らし、指し示し、路と導みちとなりし物。その鏡面には未来が映ると伝えられ、由緒正しき巫女の一族に祀られてきた物だ。

鈴。

福を誘い、呼び招き、そこに成功をもたらす物。その気高きながら優しき音色は、癒しの力を持つとされ、世を渡り歩く踊り子が身につけた物だ。

刀。

眼前の障壁を切り払い、なぎ払い、穴を穿やつ為の物。その刃に宿るのは、柔軟に姿を変え、穢れを払う水の性さが。古き時に最強と謳われた武家の一族に伝わる物だ。

それは皆、大切に崇められ、守られて何百年もの時を越えてきた。それぞれに不思議な力を宿すとされて。だが、それら皆に共通するもう一つの力の存在は、いつの間にか時の彼方に置き忘れられて来てしまった。

しかし、我等は忘れない。此処と現世の狭間に身を置き、その両方に干渉する力をもつこれらの物が、我等の望みに必要不可欠なのだから…。

三角形を描くようにし、その頂点にそれぞれの品を配置して、黒デイスクンター衣の狩人は立っていた。それらは、なんらかの力が働いているのか、手を添えずとも自ら宙に浮いている。青みがかった儚い光が、ぼん

やりと周りを覆っていた。

その三角形の中心、そこには何か球状の黒い点が場所を占めていた。

物質的なものがそこにあるというわけではない。ただ、別のある場所から視線をずらしていった時に、唐突に何も見えなくなるのだ。奥底の知れない無限の闇。何もかもを吸い込んでしまうという、ブラックホールを思わせるような黒点が、徐々に広がりつつあった。

その様子を囲んで見ている、これまた黒い集団が、興奮を隠しきれないかのようにさざめく。

これは、彼らにとって待ちに待った瞬間だった。正確な時間を数えるのも不可能なほど長い間、彼らは抜け出すことの出来ない異次元に閉じこめられていたのだから。

広がりつつある闇は、彼らにとっては希望の象徴。望まざる暮らしを続けなければならなかった今までからの、解放を告げる至高の空間。

それが現世と呼んでいるあちら側の世界で、どんな影響をもたらすのか、知らないわけではなかったけれど、彼らはそれを黙殺した。今、彼らの脳裏に浮かんでいるのは、彼らにとっての楽園でこれから過ごすであろう悠久の時間だけだった。

だがそれは、思いもしなかった闖入者によって、脆くも崩れ去った。

…それは、彼らが先ほど葬り去ったはずの、武家の血を汲む因縁の少女。

ピイイイーーーーン……

瑠璃が弾けるような音をさせて、宙に浮いていた品々が突然、力

を失ったように落下した。

壊れてしまつては取り返しがつかなくなると、慌てて手を伸ばした黒衣の狩人デイズハンターがその手に収めたのは、二品だけ。残りの一品は彼らの手に落ちる寸前に、空中に波紋を立てて消えた。

その一瞬にして、先ほどまであれほど落ち着きがなく、ざわめいていた狩人の面々が、水をうったように静まりかえる。

そうであつたから、その次に聞こえた巨岩を砕くような大きな音がなおさら大きく聞こえた。

狩人達の視線が、一斉にその音がした方向へと向けられる。霧が辺りを覆っているとはいえ、黒衣の狩人達デイズハンターの目には、わずかに立ち上る土煙が確かに見えていた。場所は：先ほど彼らが穿った大きなクレター。

「あの娘……!!」

歓喜から憎悪へと。一瞬にして取って代わられた感情は、呪詛となつてそのフードに隠れた口からこぼれ落ちる。

どこからともなくお決まりの黒色の槍を取り出した彼らは、未だ土煙の収まらないその場所へと迫った。



「もう少し上……。そう、そこでいい。そのまま押さえていてくれ」
「ん、了解」

なぎさに言われるままに、ペンライトを掲げてその場で止める。手のひらサイズのそれは、本当に小さな光しか生み出さない。でも、なぎさはそれで良いと言った。

ごそごそと岩壁の向こうで動く音がする。それが収まったと思うと、先ほど開けた穴からなぎさが腕を伸ばしてきた。

右腕。ここに来る前、手当てのために使った破いた服の袖は外されていた。動かし続けていたためか未だに血の止まらない傷口は、紅い血をうっすらとにじませている。その腕が、私がかざし持ったペンライトの明かりと、地面の間に割り込んだとき、ようやくなぎさの意図を理解する。

狙いは影だ。そう、夕凧を手元に招き寄せるとき影を利用しているのだと、彼女は言っていたのではなかったろうか。

以前のことを思い出す。初めて夕凧を呼び出したあの時、なぎさはどうしていただろうか。

臍気に思い出した、小瓶から流れ出て影と交わった紅い液体の様子が、今傷口から腕に筋を描いていくなぎさの血と重なる。指先まで流れ着いたその血の一滴が、指を離れてなぎさの影と交わった。影に波紋が広がる。

小さな影いっぱいに広がった波紋は、しばしの間沈黙し、次の瞬間には実体的な影が立ち上がった。

「きゃっ！」

「！！」

それから避けようとして、上体を逸らした私は見事に尻餅をつく。反対になぎさは余裕を持ってその動きを見切ると、それを掴んでまとわりつく黒い影が振りほどけないうちにそれを岩に突き立てた。

響き渡る破碎音。

細かな小石が顔に当たる。腕で顔をかばっていると、その腕を突然ぐいと掴まれた。

「立てるか？」

「っ！なぎさ！」

なぎさがそこに立っていた。

土で多少汚れてしまっではいるが、端正な面立ちはそのままだし、口元に浮かべた笑みは綺麗だ。そしてその手元には、付き従うように
在る夕風の姿があった。

「賭けは私の勝ちだ。ここから巻き返すのでしょうか」
「つつ！…まあ、そうこなくっちゃね！」

不敵ななぎさの言葉に笑みを返して、私も立ち上がる。

今まで胸を満たしていた強張った思いはいつの間にか消えて、その代わりに暖かな興奮が新しくわき上がったいた。

鈴

風が流れた。

足が地面に軽く触れた、と思った瞬間、その向きが半回転する。優雅なターン。流れるようなその動作の内に、上半身の方では閃くような銀光が疾る。輝かしい白と、それに対比される黒。そのうちの一方は瞬く間に姿を消した。

「わお、お見事。流石だね」

「策を弄する必要もないな。頭に血が上りすぎてるんじゃないか？」

チン、と澄んだ音を立てて一度なぎさが刀を収める。彼女の後ろで、崩れるようにして二体の黒衣の狩人^{デイズハンター}が宙に散っていった。先ほどまで彼らが持っていた鏡と鈴は、今私の手元にある。

良いところまでいった彼らの儀式？を妨害したことが、いたく気に障ったらしい。こういうパターンは物語上、よくあることなのだがどうやら彼らはそれを知らなかったようだ。ーいや、当たり前か。

いっぺんになぎさがいるであろうと当たりをつけたあの場所に狩人達が集中してしまったので、一足先に移動していた私たちはなんの苦労もなく、夕風以外の儀式用具を奪い返すことに成功した。今はただ、沈黙しているだけなのに、それらは一般人である私にさえ分かるような力を放っている…気がする。

片腕に収まりそうなそれらを、あえて両手に抱え込むようにして、私はなぎさへと視線を向けた。

「んで？これからどうしたらいい？」

「まずはここからの脱出だが…。私は次元をつなぐ方法は知らない。手っ取り早いのは、いつもと同じであいつら全員を倒すことだが…」

なぎさの言葉に頷いて、でも私は眉を寄せる。どうしても気になる疑問が抜けなかったから。

「こっちにとっては好都合だからいいけど…。いくら何でも鈍すぎない？ さっきからこっちに来る様子がさっぱり見えないし…」

ここに来た当初と違って狩人達の動きに精彩が無いように思う。最初はこっちの動きがまるで分かっているかのようで、それをあえて黙認していたような感じも見られたのだが、今はそれがない。

今だって隠すことなくなぎさが夕凧を使って、二人の狩人を倒したのを感じ取った様子もない。違和感を覚えるのも致し方ないことだろう。

「冷静な判断力が失われている、というのもそうだが…。一番の原因はアレだろうな」

そう言ったなぎさが指さしたのは、気味の悪い色をした穴だった。さっきから気にはなっているけど、薄気味が悪いから視界に入れないようにしてきたのだが…。こうなってしまうと、見ないわけには行かなくなってしまう。

渋々ながら首を動かし、ソレを見て、やはりながら顔をしかめてしまった。

おぞましいほどに毒々しい混沌とした色。濃い紫やら、緑やら、茶色やらがごっちゃまぜになって黒くなった…。そんな感じだ。はっきり言って美的センスは皆無である。

「なぎさ…アレ、何？」

「はつきり言って、私たちにとっては最悪なものだな。喻えるならばウィルスだよ。現世と異次元との秩序かべを無作為に壊していく…ね」
「うわー。きくだけでいやになってくるね」

「…里奈、棒読みだぞ」

少々現実逃避が混ざってしまったが仕方がない。元々私はこの世にもいる一般人なのだから。…いや、自分が望んでここに来たんだっただけ。

閑話休題。こんな回想をしている場合ではなかったのだった。

私たちが来たときからそこにあつた黒点は、今もまだ広がり続けている。そのなかに時折見え隠れしているのが、私にとって見覚えのある風景に見えるのは、気のせいであると信じたい。

「あれから発せられているエネルギーは相当なものだ。そのせいで、この次元もあちこち波長が狂ってきている。いままではこの場の状況が手に取るように分かっていたアイツらも、そのせいで調子が狂っているんだろう」

「あ…なるほど…」

相づちはうったが、いまいち意味が分からない。だが、これの陰で狩人達がここに来るのを押さえていられるみたいだ。…正直、複雑。

そういうなぎさもあんまりいい気分ではないのだろう。心なしに顔色が悪い。

そう思ってから、自分で後悔する。なぎさの顔色が悪いのは当たり前だ。血が流れるほどの怪我をしながら、黒衣デイズハンターの狩人との戦闘。人数という戦力差から劣勢に追い込まれ、一時はどうなるのかという状況にまで追い込まれたのだ。それからまともな休息だって取っていない。疲れているのは当たり前だ。

私でも何かできればいいのに、と思う。なんとも虫のいい話だと

自分でだって思うが、そう思わずにはいられない。先ほど少し手伝えたとは言っても、私はただここにいるだけなのだ。

胸に抱えた二つの品に、心なしか力がこもる。

せめて、このうちの一方を私が扱えたら…。不思議な力を秘めているというなぎさの夕凧のように、私も何かが出来るかもしれないのに…。

……そんな想いは、時として本当に伝わるのかもしれない。

シャラン……

最初に聞こえたのは、幻聴に近かった。それは私だけに聞こえてきた、心に直接響く鈴の音^ねだったから。

胸元に暖かな光が生まれる。思わず腕の力を緩めれば、そこからゆっくりと浮かび上がってくるものがあつた。

「里奈……？」

「聞かないで、なぎさ。私にもなんだかわからない」

口を開いたなぎさを先に制す。驚きで声も出なくなるという状況になっていないところを見ると、思ったより私は落ち着いているようだった。

改めて真っ正面からそれを見つめる。目線の高さで浮きながらとどまるそれは、仄かな燐光を放ち続けていた。なぎさの夕凧が鋭さを思わせる青白だとすれば、これは暖かさを象徴するような橙。

その暖かな光に包まれて、手のひらに収まりそうな鈴があつた。二つずつ対^{たい}になって、赤色の飾りひもで手首ほどの輪っかを作るようになっているものが二つ。

手を伸ばせば、拒絶されることもなく、逆に受け入れるように一

際強く輝いた。

それから伝わってくる言葉にならない意識、感情とは呼べないような強い想い。けれど、次に自分が何をしなければならぬのかはおのずと理解できた。

「…うん、わかった」

「……なにがだ？」

問いかけてくるなぎさに、私はとびっきりの笑顔を向ける。…そう、この笑みが暖かな日だまりのように彼女を癒すものとなればいい。

「ひ・み・っ♪」

言わなくてもきつとすぐに分かるから。

言葉の裏にそんな真意を潜ませて、私は迷いなくそれらの鈴を手にとった。

底力

鈴は私の手首にピタリと収まった。糸の感触が吸い付くようで心地よい。

試しに軽く手首を振ってみると、澄んだ音が響き渡った。

「うん、これで良し」

「：里奈？」

「なぎさ、動かないでね。：ああ、別に自然体でいいから。すぐに終わるよ」

一連の私の行動を黙って見ていてくれたなぎさだったけれど、さすがにしびれをきらしたらしい。遠慮がちなながらも声をかけてきた。

そんななぎさにろくな説明をしないまま、私は彼女の正面に立つ。身長差のせいで、顔を見ようとすればどうしても見上げる形になってしまいが、今はそんな必要は無い。

静かに息を吐き、目を閉じて、気持ちを落ち着ける。

今からやろうとしていることを、今までにやったことなど有りはしない。自分が出来るということさえ、今になって知ったくらいなのだから。：けれど、不思議と失敗する、なんて思わなかった。

自分が自信家だなんて思ったことはない。どちらかといえば、失敗を怖れて尻込みすることのほうが多いに違いない。だからそう思っている自分自身がおかしかった。

心臓が早鐘を打つ音が聞こえる。どこかで滴った水滴が跳ねる水音が聞こえる。少し離れた場所で拡大を続ける黒い穴が発している、空調機が出すような低音が聞こえる。自分となぎさの息づかいの音も聞こえる。

それら全てを、意識から閉め出す。唯一、感じ取るのは鈴の音だけ。

シャラン…

一番最初のその音を聞く。あとは、体が勝手に動き出していた。

シャンシャン、シャラン……

舞う。音に導かれるように。

詠う。その体を揺らして鈴の音が。

涼やかなその音が重なっていくにつれて、鈴が再び橙の光を放ち始めていた。暖かな光は、フワフワと蛍が飛び交うように宙を舞い、そして最後にはなぎさの右腕へと集中していく。

シャンシャンシャン……

鈴の音は止むことがない。よどみなく、流れるように、独自の旋律を紡ぎ続ける。

そして、響きの強さに比例するように、橙の光が輝きを増した。

「つっー！？」

なぎさが声にならない音をこぼす。

そこに含まれる思いはきつと驚愕なのだろう。可笑しい。いつも想像を超える行動を見せて、人を驚かせるのは彼女の方なのに。だからこれは、私のちよつとした意趣返し。

シャラン……

最後の一言に、光が一際輝きを増して…消えた。

隅々まで意識を通わせ、ピンと伸ばしていた腕を下ろして、私はほうっと息を吐く。少し、息が上がっていた。

深呼吸を繰り返して呼吸を落ち着かせながら、目だけはなぎさの方を見る。彼女はこっちを見返すことはせず、言葉も無いままに己の右腕を見つめていた。

「里奈……」

「えへへ。驚いた？」

ここまでうまく行くとは思わなかったんだけど、と付け加える。なぎさの右腕。そこには先ほどまでであった赤い血の色はない。傷跡さえも残っていない。あるのはただ、きれいな肌だけだ。

「…癒しの鈴、流浪の踊り子。そういえば、以前霧兄に聞いたような気がするよ」

「そんなたいそうなものじゃないって。たんなる素人の底力だよ」

ようやく整ってきた息に仄かな笑いを含めてなぎさに返す。でも…流石に疲れた。やっぱり、慣れないことはするもんじゃない。

「お膳立てはしたわよ。フォローはするつもりでいるけど、あんまりあてにはしないでね」

「ここまでやってもらえたら十分だよ。それに、これほど力強い味方が出来るなんて、思いもしなかったさ」

「ふふ、嬉しいこと言ってくれるじゃない。でもおだてても何も出ないわよ」

「まさか。おだててなどいないさ。心からの本心だよ」

そう言って笑い、なぎさは夕風を両手で構える。

たかが片腕、されど片腕。構えた様子には先ほどまで見られなかった洗練された美しさが宿っていた。

「せっかくのものをを見せてもらったんだ。私たちも続かなければな」
なぎさの声に呼応するように、夕風が青白い輝きを放った。

◇ ◇ ◇

腕の立つ者というのは、たとえ敵が大勢いたとしても一人ずつ倒していく…というのが、セオリーらしい。それに従ったわけではないが、まあ案の定、そういうことになったわけで。

「…これで、18だな」

「あれ？そう？私はてっきり19かと…」

霧が立ちこめているのが、今度は此方に有利に働いた。

あっちに味方したり、こっちについてみたり忙しいものだが、これは単に状況と視点が変わっただけで、ただ存在しているだけの霧になんの罪もない。故に非難されるいわれはないのだが、そこは私の心の平穏を保つために多めに見てもらうとしよう。

分散していたらしい黒衣の狩人^{デイズハンター}を見つけ次第、なぎさが攻撃を仕掛ける。なぎさ曰くの、‘癒しの鈴’、使えるようになった私だが、戦闘能力と言われるものは皆無なので、少し離れたところで待避。

そんなこんなを繰り返して、一体どのくらいが経っただろう。…もとより、ここに来たときから時間の感覚など麻痺しているに等しいのだが。

「数は減らしてるけど…。いつまで続ける気？相手の数も分からないのに、無理があるんじゃない？」

「それもそうだが、他に方法も思いつかない。とりあえず、続けていくしかないだろう」

私よりもこの世界に身を浸して久しいなぎさでさえわからないのだから、私にだって分かるわけがない。そうなると、このままということになるのだが、それはいささかまずい気がする。

いくら、回復する術を見つけたとはいえ、長期戦は不利。先が見えない戦いは、精神だって疲労させる。今は、突破口を捜すことが先決だった。

そこまでの会話を交わしたとき、何かに反応するように手首の鈴が震えて小さな音を立てた。

「なぎさ、次来たよ」

「ああ、そうみたいだな」

未だ濃い霧の中を、見透かすように見つめる。
まだ、晴れる様子はない。

頓挫

静かに、けれど確実に、その黒い点は浸食を続ける。

今はまだ、その危険性に気づく者はない。その実態にも、その無慈悲さにも。

そう、今はまだ…。

◇ ◇ ◇

それが起きたのは、たしか二十数体目を倒し終わったときだったように思う。

なぎさがふるった銀閃の向こう側が、その刹那の間に装いを変えたのは。

「なぎさ、あれ…」

「どうかしたか、里奈？」

こちらを見て首を傾げるなぎさにただ首を振って、私はなぎさの背後に真っ直ぐに指を向ける。肩越しに後ろを振り返った彼女は、その端正な面差しに険をにじませた。

「どういうことだ…？」

「やっぱり、ちょっと異常だってことだね、それ」

そう離れた所ではない。せいぜい二百メートルがいいところ。その場所に霧が晴れた所があった。いや、晴れたのではない。唐突に、霧が途切れた所があった。

後ろを見れば、変わった様子は見られない。その中に何人もの黒デイズハンター

衣の狩人を隠しているのに、不気味なほどに静かな濃霧。けれど、前を見れば何度吹き飛ばしてもしつこく現れてきた霧の姿はない。それだけではなかった。一番最初に確かめた、まるで湿地帯のようだった地形はそこを境に一変していた。

「森…？」

「にしかみえないよね、あれは」

代わりに視界を埋めるのは、見上げるほどに高い木の数々だ。空を見透かすことが叶わぬ程に生い茂った葉っぱ。そしてそれは上から注がれる光を下に通すことも拒み、暗い影を地面に投げかけている。

なぎさが言葉をつまらせたこと。そしてこの状況から分かること。それはきつと、交わるはずのない次元が今同じところでリンクしているということーつまりは、あり得ないことが起こっているということだ。

立ちつくす私たちの足下で、それまでしっかりと足下を支えてくれていた地面が不意に力を失った。

「ーっっ！！」

「わわっ！」

直前で気づいたなぎさが、私を抱えてその場から跳びすさつてくれる。

相変わらずすごい身体能力だ。いや、そんなことに感心している場合ではないのだけれど。

「今度はなによ…」

つぶやく私の視界を埋めるのは、金色に輝く砂。そして真上からは、久しくご無沙汰だった太陽が眩しく照りつける。突然の熱波が私たちを襲った。

「砂漠だな」

「ええ、そのようね。信じられないけど」

「通常、と呼ばれるような感覚は捨てた方が身のためだぞ。持っていたって疲れるだけだ」

「ご忠告をありがとう。信じる、信じないは別にして、受け止めた方が良さそうね」

「といっても、私もここまでの状況は初めてだけだな…」

ため息をつくような調子でなぎさが言う。もしかしたら舌打ちでも飛び出してきそうな勢いだ。

「どうなってるの？」

「多分、ほったらかしたままにしていたツケが回ってきたんだろう。全く次から次へと厄介事ばかり…」

そうばやくなぎさは珍しい。こういう場所では無かったら、記念写真をとって飾っておきたいほどの貴重さだ。まあ、出来るわけがないので記憶の中に刻みつけて留めるのみにしておく。

注意深く辺りを見回してみると、変化が起きているのはここだけではない。遠くかすむ視界の先でも同じようなことが起きているらしかった。

そして、おおよそではあるが、それらの現象はとある一点を中心にして起こっていた。

「問題は…あれ？」

「おそらく、な。どっかから話の通じる奴を連れてきて何とかさせ

るつもりだったんだが、そうも言ってられないみたいだな。この状況はかなりまずい気がする」

最後に見たときよりも、広がりが増した黒点を見据えてなぎさが言う。同じく、視線をそこに向けながら私は聞いてみた。

「まずいつて…どこらへんが？」

「いまはまだそうじゃないみたいだが、次元の境界が崩れているということは、いずれ私たちの住む場所もこれに混ざることになる。もし、まだ人がいないところだったらいいが…」

「もし、どっかの大都会だったら…。それは確かに大事ね^{おおごと}」

昨日まで普通の住宅街にいたのに、家を出たらそこは砂漠でした、なんて事態に陥ったら確かにパニックだ。笑えない。

理解力の乏しい私は、今更ながらに事態の深刻さを理解し始めた。

「ど、どうするの!？」

「大本になっている黒点^{アレ}をどうにかすればいいんだろうが…」

硬い口調で言っていたなぎさが、突然ハツとしたように言葉を止めた。

頭に疑問符を浮かべる私をよそに、彼女は私の前に立つと静かに夕風を構える。遅まきながら、その意味を察した私が息を呑む中で、そいつは砂の中から現れた。

「無駄だ。もう、この現状は止まらない」

「無駄だろうがなんだろうが、私にはあんた達とここで心中する意志はない。おとなしくどうにかする方法を教えろ」

相変わらずの黒一色。砂の中から現れたというのに、そのマント

には砂粒ひとつついてはいない。それも少々不気味ではあったが、今は先ほどもどとは違い、問答無用で襲いかかってくるわけでもないその様子が、その思いに拍車を掛けた。

「無理だな」

「ならばお前も消すまで……！」

「止められるのならば、既にそうしている」

予想外のその言葉が、なぎさの言葉を遮った。

舞い降りる沈黙。緊張した雰囲気に伴ってというよりは、あつけないとられたと言った方がいいだろう。事実、前に立つなぎさは驚いたように目を見開いている。

「どういう、ことだ……？」

「：同胞はもう、あらかた消えてしまった。現れた、他の次元へ身を投じて。……所詮、我等の望みなど叶うわけなど無かったということさ……」

最初耳にした時と何ら変わらない、くぐもった声。しかし、当初は無感情だと思った声音に、自嘲の響きが混ざっているような気がしてならない。

「望みとは、いったい何だったんだ……？」

「容易いことさ。戻りたかった……我等が居た次元にな」

なぎさが握った夕風の柄に力を込めると、私が両手で口元を覆うのとは、ほぼ同時だった。

本能

忽然と人が消えてしまうということは、昔はよくあったらしい。

それは、ただ単に自然深い野山や海で事故にあって見つけられなかったり、昔風に言うのなら物の怪なんかに襲われたとかいうんだろうし（前まではあり得ないだろ、って信じてなかったけど今ならあり得るかもしれないって思うから）はたまた恋人同士で駆け落ちなんてこともあったのだろうと思うんだけれど。

けれどそんな理由なんて関係なく、本当に唐突に人が消えてしまうことはあったらしい。

偶然口を開けた異次元への扉にたまたま迷い込んでしまった者達
が。

言葉少なに語った黒衣デイズハンターの狩人の話を簡潔に言くと、そういうことになるらしい。そして此処にいる彼らは、迷い込んでしまった者のなれの果てだということだ。

「なぜ、今更になってそれを私たちに語る？」

尋ねるなぎさの声はまだ冷静だ。少なくとも私なんかよりはずっと。けれど、それでも声には若干の震えが混じる。

無理もないと思う。だって今まで倒して：消してきてしまったものが元は人間だったなんて、簡単に信じたいものではない。

「私は今までに何度同じ事を聞いた？ 何度やっても無駄だと言った？ その度に譲るつもりなどないと言ってきたのはお前らだろう？ こんな：こんな風になってから語るなどと、一体何を考えている？」

驚愕によってだった声の震えが、今度は激情によって震える。
きつい眼差しで黒衣の狩人^{デイズハンター}を見据えて、なぎさは声を荒げた。

「私はっ！今までに一体何人をつっ！」

“人”などと言う数え方は不要だな。我等は人ではあったが、いまやもうそんなものではないのだから」

「……じゃあなんで、そこまで自分のいた世界に戻ろうなんてするのよ」

思わずそう問いかけていた。

なぎさにこれ以上話し続けさせるのは忍びなかったし、疑問が押さえきれなかったというのもある。私が直接話しかけたことなどなかったけれど、相手は気にする様子もなく返してきた。

「此処にいて安穩と時を過ごしていても、やがて迎えるのは消失なのだと悟ったからだろうな」

「たとえここに迷い込まずに、現世で人として生き続けたとしてもいつかは死ぬことになっていたわ。それと何が違うのよ？」

「死と消失は異なるものだ。それにここには何もない。生を全うして死を迎えるのと、何も為さずにただ消失するのに違いが無いなどといえるのか？」

「それは……」

言葉に詰まる。

そうだと、違うとも言い切れるほどの語彙も、考えも浮かばない。咄嗟に言葉を返すためには、私の脳の容量は足りなかった。

「我等はそれを厭った。そうして行動をおこすことが、言うなれば目的だったのかもしれない。……もう意味を為さないが」

だんだんと語尾が掠れていく。それに気づいてうつむいていた顔を上げると、いつまにやら黒衣デイズハンターの狩人の姿が朧気だった。

ハッと息を呑む。失念していたが、あいつの居るその場所は……。

「あ、あんた……」

「もう刻限のようだな。仕方あるまい」

事実を受け止めるだけの淡々とした声。

ああ、全く。こういう時になってから、そのひとつひとつが人間らしく見えてくるなんて反則だ。

唇を引き結んで、狩人が霞んでいく様子をにらみつけるようにして見つめる。いまやもう、その姿は砂漠が生み出す蜃気楼のように頼りないものになっていた。

「……ひとつ忠告をしておこうか」

唐突に言われた言葉にとまどう。訝しげな表情をありありと浮かべて居る私の横で、なぎさが今までうつむけていた顔を上げた。……表情は影になっていて読めなかったが。

「皆が皆、我のように現状を甘んじて受け止めているのだと、思わないことだ」

金色に光る砂漠を背後に、その背景に似合わない黒衣をまとう狩人は最後の言葉を紡ぐ。

「我等は、同じように生まれた存在ではあっても、思念が同じという訳ではない。同じものを求めて共に行動をしていたとしても、意志の疎通が出来ているわけではない。統率者が居るわけでもなく、はたまた皆が皆、我と同じように思考をまとめる者であると言うわ

けでもなかうよ」

「つまり……？」

一挙に並び立てられても、直ぐに理解できるものではない。回りとどい言い回しは後にして、簡潔に言って欲しかった。

「同胞は、あらかた消えてしまったと言ったか……？」

聡いなぎさはそれだけで何かが分かったようだったが、まだ私には分からなかった。目線が隣のなぎさと砂上の黒衣の狩人との間を行き来する。

狩人がにやりと笑ったように見えた。

「聡い者は嫌いではないよ。最期の時を共に過ごすのが、そなたであって良かったのかもしれない」

「それはどうも。……さて、返答は？」

なぎさの声が少しばかり硬い。

今更になってそう気づいたのだと、それこそ今更になって気づいた。

「来るぞ。本能のままの連中が」

黒衣の狩人^{デイズハンター}はそう告げた。

「知性も、理性も、はたまたあったのかどうかも分からない同胞からの抑止力も無くなった者達が。お前達を敵だと見なして、殺す気でな」

最期の言葉と共に、砂漠の上から黒衣の狩人^{デイズハンター}が塵となって風の中

に消えたのと、なぎさが急に私の手を引いて走り出したのと、周囲からどこからともなく真っ黒い影が飛びかかってきたのが、ほとんど同時だった。

毒

向こうから黒い影が迫ってくるのを見て、私は両手を真っ直ぐ前に伸ばした。奥歯に力を込めて力を込めると同時に、伸ばした腕に衝撃が伝わる。

薄目を開けて前を見れば、ぼんやりとした橙の光のすぐ向こう側に、黒い影が見えて、消えた。

「つつ！ たく、もう！」

舌打ちをひとつ。

気配が離れた（といっても私が察知能力に長けているというわけではない。全ては手首の鈴のおかげだ）のを確認して、私は気配が去っていったのと逆の方向に駆ける。

五十メートルの全力疾走。

先ほど唐突に出現した大きな岩陰に走り込んで、息をつく。一際大きな深呼吸の後に、背中からずるずると座り込む。完全に息が整うのに、大分時間がかかった。

背後はこれでいくらかは大丈夫だろう。正面は、ある程度ならばさっきの力で防ぐことが出来る。

何時の間にこんな事が出来るようになったかというところ、ついさっきだ。接近してきた黒い影を避けきれずに思わず手をかざしたら、出来てしまったという代物。

とはいっても、自分の身を守るのに精一杯。壁と形容できるほどには頑丈ではなく、その強さは私の精神力や体力に比例する物のようだ。強いて喩えるならば、ガラスといったところだろうか。

強い力を加えれば、容易く砕け散ってしまうだろう。

そうして、この期に及んでも私に戦う力はない。少し前に手に入れた癒しの力。こうして今手に入れた、ほんのちょっとした守りの力。そうしてこの場において私が出来ることと言ったら、ほんの片手に余るほど。

歯がゆくないと言うことは、自分に嘘を付くことだ。出来れば、もつとなぎさの助けになりたいと思う。…そんな中。

なぎさの姿は側にはない。

今彼女は、別の場所でデイズハンター黒衣の狩人の相手をしているはずだ。目を凝らせば、舞っているかのように軽やかに動く、なぎさの姿が目にはいる。

彼女の元に飛びかかるいくつもの黒い影が見えたが、それらは彼女の近くに寄ることも叶わず、青白い輝きを持つ力の塊にはじき飛ばされていた。

そう、風に。

あれからなぎさは夕風の刃を疾らせることをしていない。

きっと本人は無自覚なのだろうと思う。事実、操る力はますます冴え渡っているかのように、効果を發揮している。でも、今までの彼女の戦い方からすれば、全然違うのは馬鹿な私にだって分かる。

（やっぱり、あのことを引きずってるのかな…）

あれから、走り回った時間は長いように感じるけれど、実際はそれほどでもないはずだ。

言葉を交わす暇もなく別行動を取らざるを得なかったので、その真意は確認できない。でも、あの動揺の様子を見れば、ある程度の予測は立てられる。

…きつと、今になって知った事実には、今まで抱えてきた疑問をぶつけているのだろう。

私は今まで何を斬ってきたんだ？

人ではないと言っていた。…けれど、遙かな昔にそうであったことを否定はしなかった。

ずっと敵だと言われてきた。…護る物を狙われているからと言って。

自分の身を守るために。…彼らがそうでないと、どうして言い切れる？

疑問は困惑を生み、困惑は迷いを作り出し、迷いはその動きを鈍らせる。きつとなぎさが陥っているのは、そういう状況だ。

私にそれがないとは言わない。けれど、いかんせん、関わった期間があまりにも違いすぎる。そして、攻撃する術を持たない私は、彼らを――黒衣の狩人^{デイズハンター}をこの手で消したことはない。…そんな、決定的な違いのために、私はなぎさの気持ちを正確に推し量ることはできないのだ。

でも。

ここで、なぎさの気持ちばかり考えているわけにもいかないのだ。ただ、時間をここでつぶすために、引き留めるなぎさを振り切っても、別行動を取ったわけではないのだから。

(どうすればいい!?)

なぎさの心が――いつも冷静に物事を眺めているようで居て、どうしても冷徹になりきることの出来ないなぎさの優しい心がこれ以上傷つかないためにも、今の状況をひっくり返す手だてがいる。

もしなぎさが直接的に手をかけずに、狩人達を総じて倒すことが

出来たとしても、壊されてしまったという次元間の秩序を取り戻すことは出来ない。となれば、その問題を根本的に解決するための、別の手段が必要となってくる。

（探してやろうじゃないの…！）

戦う術の無い私に、出来ることといったら、今はそれくらいしか思いつく物が無かった。

なんの見通しもつけずに、勝手に飛び込んできてしまったのは私だから。なぎさの様子を側で見ている事しかできなかった足手まとの私だけど、今は自分の身を守るくらいは出来るようになったから。

――矢面に立つのは全部なぎさに任せっきりだ――

浮かべた笑みで誤魔化しながら、それでも悔しそうにしていた霧也さんを思い出す。

だからせめて、彼女にその双肩にかかる重さを、全部ではなくて八割くらいには減らせるように。

「さあ、次行くわよ、次！」

気づかれることになろうとも、自らを鼓舞するためにあえて声を張り上げてみる。同時に身を預けていた岩から背を離し、再び全力疾走。

背後から聞こえてくる戦闘音は、努めて無視だ。目指すのは、もうひとつではなくなった、黒々とその存在をますます強調させ続けるあれら。

（絶対何かは見つけてみせる！）

果てが見えないこの広大な次元の中で、点在している黒点^{ウイルス}。毒をもって毒を制とするならば、やはり必要不可欠なのは、その毒のサンプルなのだろう。

だから、向かうのは諸悪の根元。

…そう思っても構わないよね？

光明

ゾワリ、と背中が粟立った。

雰囲気が違う、空気が違う、言い表せられない何かが違う。

向かっているのはそういう場所だった。

此処には、奴らも近寄りたがらないのだろうか。もう見慣れてしまった黒い姿は、今はほとんど見られない。良いことなのだと思うのだが、周りにいるのは私一人だというような感覚は、結構くるものがある。

（これじゃあ、がむしゃらにあいつらを相手していた方が良かったかも…）

そうは思ってもそうしないだろう自分を内心では笑いながら、私はさらに先へと歩みを進める。

額に浮かぶ冷や汗をぬぐう。もうこれで十度目か。気持ちはずいぶん誤魔化せても、体だけは正直だという証明にはなったわね、とぼんやり思う。

そんな関係のないことばかり考えながら、私は歩を進める。走ることはしない。残り少ない体力はここぞという時のために残しておかなければならないし、それに周囲を満たす圧迫感がそれを良しとはしなかった。

なぎさの戦闘音が遙か彼方から聞こえる。実際はそれほど遠くないだろうと思うのだが、自分の鼓動の音がかなり大きいので、そんな感じ方になってしまうのかも。

でも今は、彼女の方を気にしてはいられない。心配していないと

いう訳ではないのだが、彼女が黒衣の狩人相手に遅れをとる様子はどうしても想像できなかった。

たとえ、彼女が心に大きな衝撃を受けているのだとしても。なぎさはそれを表に出すようなことはしないだろうと思っている。それが良いことだとは思えないけれど。でも、彼女が気持ちを外に出さないのなら、こっちの方が悟ってあげれば良いだけの話だ。

話が逸れた。

要するに、言いたいのはなぎさは大丈夫だと、問題ないと信じているということ。だから、私は彼女のことは意識の奥に無理矢理にでもおいといて、別のものに耳を傾けることにする。

シャン……

鈴の音。なぎさが側にいない今、私が一番信用できる物だ。

：それを扱っている人が、私だと言うことが一番の不安要素ではあるけれど。

たかが鈴の音だと、侮ることをすると痛い目に遭う。同じ鈴から奏でられる音とは思えないほどに、音色に明らかな違いがあるのだ。最初はずかにしか感じ取れなかったものだが、これだけずっと一緒にいるのだ、最初は分からなかったものが分かるようになってきてもおかしくないだろう。

だから耳を傾ける。何も知らない私に、この音は確かなことを教えてくれるから。

（此処は…近い）

今までそんなことを繰り返してきて、分かったことがある。それは、同じように見える黒点のひとつひとつが実は異なる物であるということ。

オリジナル

多分ひとつの核にその他のものが誘発される形で発生している。

視覚では分かりようがないから、それを見分けるのは鈴の音の反響でだ。ここは音の通りが悪い。

（でも、分かってから…どうするの？）

今まで得てきた物はすべて、行き当たりばったりで手に入れてきたものだ。それが、今更になって変わるとも思えないから、こうしていれば何かが見えてくるかもしれないと思い、確信のないままに行動してきた。けれど、何もない。

手がかりなんて何もない。ちよつとしたことが分かったかもしれないというだけ。それで何をどうしろというのだろう。

（弱気になんてなってられないか…）

呼吸の中に、ため息を織り交ぜてもやもやとした思いをはき出す。とりあえず、闇雲に手をつけることにして、私はひとつ深呼吸をする。胸の前で軽く手を合わせ、そのまま交差させるようにスライドさせると、両の手首を叩き合わせるようにぶつけた。

シャン……………

強い音が鳴り響く。橙色の燐光が舞った。

もう一度。よどんだ空気をうち払うかのように、鈴の音を響かせる。身のうちに染み渡るようなその音に体をゆだねると、自然と体は動き出す。

本来ならば、それが顕すのは癒しの力だ。だがそれは、曲解するならば再生とすることも出来る。かなり強引なやり口ではあるが、もしかしたら…。

私が思うとおりに、橙の光は黒点の中心へと寄っていく。小さな光のひとつひとつが寄り添いあい、大きくなり、黒点の全てを覆お

うとして………叶わずにはじけ飛んだ。

「いっつ……」

手首についた鈴が震えて沈黙する。そこから電流が走ったかのような痛みがきて、小さく悲鳴がこぼれた。

相変わらず黒点は健在。私、精神的ダメージ大。収穫、全くなし。

「うわあ…、役立たずう……」

思わず言ってしまった。そしてその役立たずが自分であるなんて情けない。

まあ、これでひとつは前進した。私の力は全く敵わないと言う、悪い方向に。

（これじゃあ、なぎさに申し訳立たないじゃない！）

もちろん、ここであきらめる訳にもいかないから、半ばやけくそになって、もう一度仕掛けてみる。下手な鉄砲も数うちやなんとやらだ。

そうして、ひとり奮闘している私の所に、それはやってきて事態を変えた。

頭の片隅に届いた警告音に咄嗟に反応して、私は体を180°回転させると自分の前に障壁を作る。腕に重たい感触が伝わってくると同時に、ものすごい勢いで何かが私の側を通り過ぎ、そして後ろで爆散した。

私の織りなす障壁は、一方面しか形成できない。そして、場数がない私にはすぐに障壁を解除して、また新たに形成するという高等テクニックもない。だから、私はその爆散に巻き込まれる。

でも、吹き飛ばされながらも私はちゃんと見ていた。

通り過ぎる強烈な風。それがまとう仄かな青白の燐光^{デイズハンター}。それは全て、なぎさの操る風の特徴に一致する。大方、黒衣の狩人に向けて放ったうちのひとつがこっちにまで、流れてきたのだらう。全く、距離が結構あるというのに、たいした威力だ。

そしてもう一つ。

その風は確かに、私が試した内ではびくともしなかった黒点のひとつが切り裂かれて消えた。

「あは、あははははは……」

乾いた笑いがどこから聞こえる。

自分の口からあふれてくる声を、私は手で押さえた。笑いが止まらない。自分が道化^{ジエロ}になっていたようで、本当に笑える。

そう、方法なんて一番近くにあった。

今きた方向を振り返る。なぎさは掃除を終えたのだろうか。まあ、終えていなくても構わない。彼女には別の仕事がある。

とるべき道は見つかった。

転機

「なぎさっ！」

大切な友人の名を呼ぶ。

それに反応したなぎさは、ハッとしたように振り返った。

「里奈！無事で良かった」

「それはお互い様ね。まあ、なぎさなら大丈夫だろうとは思ってたけど…」

駆け寄りながらなぎさの顔を伺うと、やはり疲労の色が濃い。直接的な肉弾戦が少ないといっても、やはり運動量や体力の消費量は半端ないということなのだろう。

少し眉をひそめて、私はなぎさの腕を引く。周囲の様子を伺って、次が来るまでの時間のあたりをつけると、少しでも時間が稼げる場所を探して走り出した。

「ちよっ、里奈！？」

「ちよっと休憩しなきゃ。これから大仕事にかかるんだから、少しでも回復させとかないとね」

「…見つかったのか？」

方法が。

なぎさの唇がそう形を作るのを見て、私は小さく頷く。

「多分、だけどね。私にはどうにも出来そうにないけど、きつとなぎさになら…」

最初に見たときよりも心なしか大きくなっている森の中に駆け込んで、木の陰に身を隠す。近づくものが無いことを確認してから、私は両手首の鈴をうち鳴らした。

「どういうことだ？」

「ちゃんと話す。けど、まずは聞かせて。黒衣そうちの狩人のほうはどうなってるの？」

「まずは、どんなにやっても数の減りが見られないな。あいつ、だいたいは居なくなったと言っていたくせに…。本当に数全部を把握していたのか？」

「さあね。横のつながりは薄いみたいだったし、もともとの数が多すぎたのかも…。他は？」

「攻撃に、知性的なものは感じ取れない。本能のままに動いてるって感じた。自棄になってると言い換えてもいい」

「となると、そっちを全部片付けてからっていうのは、使えないよね」

「ああ。まあ、こうなってしまったら本当にそれが使えるかどうかも怪しいが」

大体は予想通りだ。となると、不確実性は大幅に上がるけれども、こっちの手を使うしか無いのかもしれない。

「里奈は？何が…いや、どうしたらいい？」

「…あくまで私の予想だけだね…」

前置きをしてから、私は見たものを出来るだけ忠実に話して聞かせる。説明は決して得意ではないが、それでもわかりやすいように。幸運なことに、私よりも数倍は頭の作りが良いと思われるなぎさは、私の言いたいことを理解してくれたようだった。

「巡り巡って、結局は力業に落ち着くのか……」

「アハハ…、やっぱりそう思う？」

「そうだな。まあ、納得がいかないわけではないし。もともと事の発端がこれらだったんだ。解決の手段も同じであってもおかしくないだろう？」

視線で手の中にあるものを指して見せて、なぎさは苦笑する。

確かに。いろいろとごたごたがあって、最初の頃の方は忘れてしまったが、これらがきっかけだったような気がする。

一人、頷いている私を横目に、なぎさは木々の間を通して向こう側を透かし見ていた。

「そうになったら、善は急げ…と言いたいところだが……」

「えっ？ダメなの？」

そう問う私になぎさは難しい顔で答えた。

「黒点^{コレ}を壊したところで、崩れてしまった均衡^{バランス}が戻るとは考えにくい。それに、もう少しうまくいったとしても…」

その後を続けようとしたなぎさの言葉を、甲高い音が遮った。耳鳴りを引き起こすような、耳障りな嫌な音が容赦なく私たちを襲う。思わず耳を押さえて周囲を見渡せば、衝撃的な光景が視界に飛び込んで来た。

「なっ！なによ、これ……」

「ゆっくり話をしている暇もないのか。全く……」

いらだちの混じる声で、なぎさが毒づくのが聞こえた。

見上げる先には、そびえ立つ木々を遙かに超える高さを持つ、黒い巨体が視界の半分ほどを埋めていた。どこからか巻き起こった風が黒いマントをはためかせる。

「四の五の言ってられなくなった。無謀だろうが無茶だろうがやるしかない。行こう、里奈！」

「無謀と無茶の違いがよく分かって無いんだけど…。えっと、どうするって？」

いまいち理解が追いつかず、なぎさの意図もうまく出来ない私は、説明を求める。そんな時間がないことには、その時には頭が回らなかった。

「決まってる！黒点^{コレ}を壊すんだよ！」

「そうしたら、どうなるの？」

「下手したら、この空間全部が無くなるかもな！」

「えっ！それはまずいんじゃないの！？」

「ああ、もしかしたら私たちも帰れない！」

「じゃあ、なんで！」

どういった経緯かしらないが、とてつもなく巨大になってしまった黒衣の狩人^{デイズハンター}から離れるようにして走りながら、二人して怒鳴るようにして話す。

それでもしないと、未だ鳴りやむことのない甲高い音にかき消されて、相手の声が全くとっていいほど聞こえない。片耳を空いている方の手で押さえながら、それでも夕風を握る手に込める力を緩ませることのないなぎさは、私に向かって言う。

「でも、そうしたら、あいつをここに閉じこめておける！」
「えっ！？」

「あいつを倒すために割ける時間はない！けど、この空間を壊せたら、ここにしかいられないあいつらは半自動的に倒せることになる！」

そう言うなぎさは苦渋の表情をしていた。けれど、迷いは欠片もない。

「彼らの境遇には同情もする。想いの強さも、必死さも嘘では無いと思う。けど…ここで譲るわけにはいかないから」

最後には独り言になってしまったなぎさの言葉を、私は必死に拾う。聞くことに必死だった私には、なぎさの最後の一言に、咄嗟に言葉を返せなかった。

「安心しろ。里奈だけは、ちゃんと返すから」
「えっ……？」

わずかな笑みがかいま見えた。その後、走るスピードを上げたなぎさに、私は追いつこうと必死で走った。

鏡

黒い気配が横を駆け抜けていく。

なぎさが放つ青白の斬撃とは、似ていながらも対極を成すまがまがしい気配を帯びた衝撃波。私となぎさの間を通り抜けたそれは、その勢いのままに前方の地面に当たって、爆散した。

「あわわわっ!!」

「つつ!!」

砕け散った土や石の破片がこっちに向かってきた。

変な声を上げながらも、なんとか自前の盾を織りなす事に成功する。避ける際に少し離れてしまったなぎさも、夕凧を使って傷を避けることは出来たらしい。土煙を振り払って立つ、その姿に少し安堵する。

「里奈っ!?!」

「問題なし!まだ真っ直ぐ、もうちょっと進んで!」

基本的に巨大化してしまった黒衣デイズハンターの狩人は無視の方向で、とりあえず目下の目標は増殖し続ける黒点ナビゲーターの破壊だ。

執行者はなぎさ。私はそこまでの案内人。

正直、こっちに來てから走り通しなので、疲労はもうピーク。限界を超している…はずなのだが、今はそれほど疲れを感じることはない。興奮しすぎると疲れも吹っ飛んでしまう、ということを実体験中の私である。

「なぎさっ!あれっ!」

「分かった！」

手元の鈴が今までとは違う震えを発したのを感じて、私はなぎさにその声をかける。即座に応じたなぎさは手にした夕風を構えた。

「花柳裂」

幾つもの剣筋がなぎさから走る。いつもと変わらない青白に輝く光の筋は、真っ直ぐに黒い塊に迫った。

光が弾ける。それを認識した瞬間、大きな爆音と目をくらませるような光が私たちを襲った。

「ビンゴ!!」

「いや……ダメだな」

歓声を上げる私の横で、なぎさが冷静に判断を下した。

効果が無かった訳ではない。斬撃は確かに黒点を切り裂いている。それだけで、私の時とに比べたら大きな進歩ではあるのだが、結果を残せなければ意味はない。

刻まれた裂傷。それは、ここで眺める数秒の間に明らかに姿を消しつつあった。

「再生効果つきか……。やはり、一筋縄ではいかないな……」

「うっそお……。それって反則……」

予想はある程度していたようで、それはどなぎさに動揺は見られない。けれど、あからさまに期待をしていた私は、がつくしと肩を落とした。

なぎさは慎重ではあるけれど、行動に様子見やためらいを残すような性格ではないはずだ。さっきの斬撃は、彼女にとっても最大規

模のものだったはず。事実上、打つ手なし、だ。

そんな私たちに追い打ちをかけるように、背後からは絶え間ない攻撃が続けられる。見当違いの方向に飛んでいくものがほとんどだったが、そのうちいくつかは私たちの近くに落ちていた。

「踏んだり蹴ったりっ！」

「泣きっ面に蜂ともいうなっ！」

なぎさと二人して、攻撃から身を避けながら、なんとか次の手を考える。けれど、避けるのに必死でなかなか考えがまとまらない。そんな中、気が回らなかった一撃が私の直ぐ側に落ちた。直撃はかろうじて避けたものの、大きくバランスを崩して体が傾ぐ。

「あ、やばっ」

懷から落ちるものがあった。慌てて手を伸ばすが、後ちよつとところで届かない。

私の指先をかすって、残りの一品、鏡が地面へと落ちていく。固い地面に叩き付けられて、割れるだろうと思われたそれは、予想とは大きく外れてまばゆい限りの光を放った。

「つつっー！ー！！」

目を覆いながら、二、三步後ずさる。そうしている間にも、鏡から発せられる光はますます輝きを増して、辺り一面を照らし始めた。そしてそのうちにそれらの光は寄り合わさって、ひとつの大きな光の筋になる。

「何コレ…」

「行く手を照らす鏡、か。なるほど、これも確かに一理あるな…」

もう何度目になるか分からない私のつぶやきに答えたのは、いつの間にか側に寄ってきていたなぎさだった。ただ、あてもなく逃げ回るわたしと違って要領のいい彼女は、攻撃を避けながらもちゃんと行く方向を決められていたらしい。多少息は切れているが、そんなことはちっとも気にせずに、視線は新しく起きた出来事に釘付けだ。

「里奈、あっちだ！」

そう言って彼女が指さした先には、光の筋の向こう側。どういう訳か、黒点の脇を突き抜けるようにして出来ているその向こう側に、見覚えのある光景があった。

「あれ…学校……？」

疑問口調にはなってしまったが、間違いない。いつも通っている学校だ。

あれだけいろんな事があったにもかかわらず、向こうの時間はそれほど進んでいないらしい。まだ、夜明け前と言ったところだろうか。

（そういえば、みんなはどうしたんだろう…？）

今まで、考える余裕もなかった問題が、脳裏をよぎる。だが、それについて深く考える前に、なぎさに手を引っ張られた。

「里奈、走れ！」

「へっ！？何で？」

「アレを使えば、戻れる！消えてしまわない内に、早く！」

口早に言ったなぎさは、その勢いのままに、私をそっちへと押しやった。言われるままにそっちに向かって走り出そうとあいた私は、ちよつとした違和感を感じて、振り返る。なぎさは、後を追っては来なかった。

「なぎさ？何してるの、早く…」

「先、行ってくれ。私はこっちを片づけから行くから」

忘れ物をした、みたいなノリでいうなぎさに私は一瞬絶句する。だが、これはそんな軽いものじゃまいだろう。

「ちよつと待ってよ！せっかく安全に帰れるって言うのに、こんな機会を逃す手はないでしょう？なぎさも早く…」

「このまま放っておけば、いずれそっちにも被害が出る。前にも言っただろう？後始末はしていかなくちゃ」

「それはそうかもしれないけど…」

「里奈」

なぎさがこっちを見て笑う。いつか、そう登校初日のあの騒ぎの時に彼女が見せたような、とても綺麗な笑みだった。

そんな彼女が、今、手に持った夕凧をこっちに向けた。

「また、後で」

突風が真っ正面から襲いかかる。防ぐ間もなく後ろに飛ばされる私は、薄い膜を通り抜けるような感覚を味わった。

一瞬、クリアに見えた向こう側。だがそれは、すぐに見えなくなってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2202r/>

The Story Of Her

2011年11月17日01時27分発行